

南国市埋蔵文化財発掘調査報告書 第23集

田村城跡

—平成16～18年度南国市重要遺跡確認調査—

2008. 3

高知県南国市教育委員会



土塁と城八幡



TR47SK 1 出土遺物

序

田村城跡は、室町時代に土佐の守護代であった細川氏の居館跡で、3重の堀を持ち、5haもの広大な敷地と伝えられています。当時は土佐の中心地であったことから、居館の周りに家臣の館や市などが開かれ活況を呈していたことでしょう。現在は宅地が増え、菩提寺である細勝寺も高知空港の拡張に伴い移転をするなど、当時の風景は土塁状の地形と城八幡にわずかに残されるだけとなっています。

南国市教育委員会では、田村城跡を保存し後世に伝えていくための資料を得るために重要遺跡確認調査として、平成16年度から田村城跡の発掘調査を実施してまいりました。

本書は平成16・17・18年度に行われた田村城跡発掘調査の成果をまとめたものです。今後広く利用され、文化財保護及び学術研究の一助になれば幸いです。

調査にあたりご指導を賜りました高知県教育委員会、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、また、発掘調査への深いご理解とご協力をいただいた田村地区の方々、そして発掘・整理作業にご尽力いただいた作業員の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

南国市教育委員会

教育長 大野吉彦

例 言

1. 本書は、平成16・17・18年度に国宝重要文化財保存整備費補助金を受け、南国市教育委員会が市内遺跡発掘調査等事業として実施した田村城跡発掘調査（南国市内重要遺跡確認調査）の報告書である。

2. 田村城跡は、高知県南国市田村に所在する。

3. 各年度の調査は以下のとおりである。

平成16年度〔第1次調査〕：平成16年10月4日～平成16年11月5日・調査面積252㎡

〔第2次調査〕：平成17年2月2日～平成17年2月14日・調査面積81㎡

平成17年度〔第3次調査〕：平成17年9月26日～平成17年11月26日・調査面積200㎡

平成18年度〔第4次調査〕：平成18年10月18日～平成18年11月10日・調査面積180㎡

〔第5次調査〕：平成19年2月7日～平成19年2月21日・調査面積144㎡

4. 発掘調査は、南国市教育委員会が主体となり、高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。各年の調査体制は以下のとおりである。

平成16・17年度

調査員 田所千佳（南国市教育委員会 生涯学習課 文化財スポーツ係 主事）

総務担当 田渕博之（南国市教育委員会 社会教育課 文化財スポーツ係長）

平成18年度

調査員 氏原 誠（南国市教育委員会 生涯学習課 文化財スポーツ係 臨時職員）

総務担当 田渕博之（南国市教育委員会 社会教育課 文化財スポーツ係長）

平成19年度

報告書作成 坂本裕一（南国市教育委員会 生涯学習課 生涯学習係 指導主事）

5. 平成17年度より、「田村城跡発掘調査検討会」を設置し、調査方法及び成果の検討を行った。

検討会のメンバーは、以下のとおりである。

高知大学教育学部 教授 市村高男

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査課長 森田高宏

高知県教育委員会文化財課 埋蔵文化財班長 松田直則

6. 本書の執筆・編集は坂本が行った。

7. 調査トレンチは、調査時には調査次ごとで番号を付していたが、今後の調査を考慮し、本書では第1次調査からの通し番号とした。田村城跡の堀と認められる遺構については内堀、外堀と表示した。その他の遺構については、調査トレンチごとに土坑（SK）、溝（SD）、性格不明遺構（SX）、柱穴（P）で表示した。

本書の標高は海拔高であり、方位は座標北を用いた。

8. 現場作業においては、高知県教育委員会文化財課、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター緒氏のご指導・ご教授を得た。整理作業においては、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター諸氏、特に吉成承三氏、筒井三葉氏の指導を得た。記して深く謝意を表したい。

9. 発掘調査にあたっては、地元住民の方々のご理解・ご協力を得た。また、以下の現場作業員、整理作業員の皆様のご協力を得た。記して深く謝意を表したい。

(敬称略)

〔現場作業員〕 吉川勉、窪田泰詔、西川初男、橋田芳雄

〔重機オペレーター〕 門田佳久、岡村知紀

〔整理作業員〕 山中美代子、土居初子、樫尾洋子、北村厚子

10. 当遺跡出土遺物は南国市教育委員会が保管している。遺跡の略号は04-01TJ、04-02TJ、05-03TJ、06-04TJ、06-05TJである。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の方法	
1. 調査の契機	1
2. これまでの調査	1
3. 調査の方法	2
第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境	
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
第Ⅲ章 調査の成果	
1. 第1次調査 (04-01TJ)	9
(1) 概要	
(2) 調査成果	
2. 第2次調査 (04-02TJ)	10
(1) 概要	
(2) 調査成果	
3. 第3次調査 (05-03TJ)	14
(1) 概要	
(2) 調査成果	
4. 第4次調査 (06-04TJ)	17
(1) 概要	
(2) 調査成果	
5. 第5次調査 (06-05TJ)	23
(1) 概要	
(2) 調査成果	
第Ⅳ章 総括	
1. 遺構	31
2. 遺物	34
3. まとめ	34

挿図目次

図1 南国市位置図	1
図2 田村城跡地名図	3
図3 田村城跡調査地点位置図	4
図4 田村城跡の位置と周辺の遺跡	8

図5	TR25～29遺構平面図	12
図6	TR25～29セクション図	13
図7	TR31～33遺構平面図	15
図8	TR34セクション図	15
図9	TR35・36セクション図	16
図10	TR40～42遺構平面図及びセクション図	18
図11	TR43遺構平面図及びセクション図	19
図12	TR45セクション図	19
図13	TR46セクション図	20
図14	TR47SK 1 出土状況図及びTR47セクション図	21
図15	TR48遺構平面図及びセクション図	22
図16	TR49セクション図	23
図17	TR50遺構平面図及びセクション図	24
図18	TR52遺構平面図	25
図19	TR53遺構平面図及びセクション図	25
図20	出土遺物(1)弥生土器	26
図21	出土遺物(2)土師器・陶器・瓦質土器	27
図22	出土遺物(3)青磁・白磁	28
図23	出土遺物(4)青花・李朝青磁	29
図24	外堀南東部遺構配置図	32
図25	内郭部遺構配置図	33
図26	田村城跡城域推定図	35

表 目 次

表1	田村城跡調査一覧表	2
表2	遺物観察表	30

写真図版目次

巻頭図版 土塁と城八幡・TR47SK 1 出土遺物

写真1 内郭部(南東より)・細勝寺(桂昌寺)跡地と土塁・外堀東辺想定地(南より)

写真2 TR1～3調査前全景(南より)・TR12～13調査前全景(東より)・TR4～11調査前全景(北より)

写真3 TR1完掘状況・TR1セクション・TR2完掘状況

写真4 TR3完掘状況・TR4完掘状況・TR5完掘状況

写真5 TR6完掘状況・TR7完掘状況・TR8完掘状況

- 写真6 TR9完掘状況・TR10完掘状況・TR11完掘状況
写真7 TR12完掘状況・TR13完掘状況・TR14完掘状況
写真8 TR15完掘状況・TR16完掘状況・TR17～25調査前全景(西より)
写真9 TR17完掘状況・TR18完掘状況・TR19完掘状況
写真10 TR20完掘状況・TR21完掘状況・TR22完掘状況
写真11 TR23完掘状況・TR24完掘状況・TR25SD1検出状況
写真12 TR25セクション・TR26～28調査前全景(南より)・TR26完掘状況
写真13 TR26セクション・TR27完掘状況・TR27西壁セクション(北)
写真14 TR27西壁セクション(南)・TR28集石検出状況・TR28外堀東壁セクション
写真15 TR28完掘状況・TR29完掘状況・TR30完掘状況
写真16 TR31完掘状況・TR31～33集石検出状況・TR32・33集石検出状況
写真17 TR34完掘状況・TR35～37調査前全景(南より)・TR35完掘状況
写真18 TR36完掘状況・TR37完掘状況・TR38～49調査前全景(南より)
写真19 TR38完掘状況・TR39完掘状況・TR40完掘状況
写真20 TR40SD1検出状況・TR41セクション・TR41SD1検出状況
写真21 TR42セクション・TR42完掘状況・TR43SD1検出状況
写真22 TR43セクション・TR43東拡張部完掘状況・TR43東拡張部セクション
写真23 TR44完掘状況・TR45南端下層セクション・TR45SR検出状況
写真24 TR46完掘状況・TR46セクション・TR47SK1検出状況
写真25 TR47SK1出土状況・TR47セクション(西)・TR48完掘状況
写真26 TR48セクション・TR48西拡張部内堀北辺検出状況・TR49完掘状況
写真27 TR50調査前全景(南西より)・TR50(東)完掘状況・TR50(西)遺構検出状況
写真28 TR50(西)完掘状況・TR51完掘状況・TR53・54調査前全景(北より)
写真29 TR52・55調査前全景(南より)・TR52完掘状況・TR53完掘状況
写真30 TR54完掘状況・TR55完掘状況
写真31 出土遺物(1)
写真32 出土遺物(2)
写真33 出土遺物(3)
写真34 出土遺物(4)
写真35 出土遺物(5)
写真36 出土遺物(6)
写真37 出土遺物(7)
写真38 出土遺物(8)
写真39 出土遺物(9)

第1章 調査に至る経緯と調査の方法

1. 調査の契機

田村城跡は、室町時代の土佐守護代細川氏の居館跡であり、南国市の指定史跡である。史料や地割りなどから田村土居を中心とした約5haの広大な土地に築かれていたと推定されるが、今は僅かに土塁状地形と城八幡が残るのみである。城域の宅地化は今後ますます進むことが見込まれる。そこで、城域の確定と関連する遺構・遺物の検出によって、将来の史跡の保存・整備を行うための基礎資料を得るための確認調査を実施することとなった。

2. これまでの調査

1979年から行われた高知空港拡張に伴う発掘調査（田村遺跡群第1次調査）における旧細勝寺脇の調査（Loc.42）では、現況水路とほぼ重複するように推定幅6m、深さ2m前後を測る南北方向の外堀（図3-①）が検出された。外堀は旧細勝寺南西隅で直角に東へ曲がりさらに東へ続いていく事が確認された。この外堀からは、大永年間（1521～1527）の年号を持つ転読札が出土しており、この時期に田村城跡がまだ機能していたことが判明した。

県道地下道化に伴う調査（Loc.43）では、①の続きと思われる幅5.5～6.8m、深さ1.2～1.3mを測る外堀南辺（図3-②）及び内堀南東角部分と思われる推定幅約8mの堀跡（図3-③）が検出された。

1996年から行われた空港再拡張に伴う発掘調査（田村遺跡群第2次調査）では、旧細勝寺西南部にある土塁の調査（A10区）が行われた（図3-④）。土塁の上部は多くの墓によって壊されていたが、基底部分は残存し、15世紀の遺物が出土しており、田村城跡の外堀を掘る際に構築されたと考えられる。また、場周道路の調査（A4区）では外堀南辺の一部も検出されている（図3-⑤）。さらに田村城跡の前面にあたる南側（B区）では、14世紀から16世紀前半にかけての溝で囲まれた屋敷跡群が確認されている（図3-⑥）。



図1 南国市位置図

2002年度には、高知空港拡張に伴い移転した細勝寺跡地で、空港周辺移転用地整備工事に伴う試掘確認調査(図3-⑦)が行われた。西側に残存する土塁の断ち削りを行い、中世段階の土塁が残存していることが確認された。また、民間開発による試掘確認調査が③の内側で行われたが、田村城跡に関連する遺構は確認できなかった。

2003年度には城域の北側にあたる字西門での民間開発に伴う試掘確認調査(図3-⑧)が行われた。すでに養鰻池により削平を受けており、田村城跡に関連する遺構は確認できなかった。

これらの調査成果から、田村城跡の城域の南と西がほぼ確定され、のこる東と北の城域の確定が課題であった。

3. 調査の方法

調査対象地区内に2m×4mを基本とするトレンチを任意に設定した。遺構の検出状況等に応じてトレンチは拡張を行った。重機により耕作土や無遺物層を除去した後、人力を併用し、平面及び土層断面を確認しながら遺構の検出を行った。遺構を検出した場合は、遺構の性格や時期等の資料を得るための必要最小限の掘削を行い、図面作成、写真撮影等の記録をとった。必要に応じて下層の確認を行い、調査後は地盤を叩きしめながら埋め戻しを行い、原状に復した。

測量等には、高知空港造成時に設置された用地準拠点を利用して南国市教育委員会が平成16年度事業で調査予定地内に設けた4級基準点を使用した。

表1 田村城跡調査一覧表

調査期間	調査地区	調査の経緯	検出遺構			出土遺物	調査主体・報告書	
			掘立柱建物跡	溝跡	その他			
1982～1983	城、二本松(Loc42)	高知空港拡張に伴う調査地下掘削工事に係る本発掘調査	11棟	15条	外堀南辺(SD15)・内堀南東内(SD1)・土坑103・井戸1・朽物不明遺物1・ビッド群	土師質土器・瓦質土器・灰磁陶磁器・貿易陶磁器	高知県教育委員会「田村遺跡群」	
1982.10～1982.12	桂昌寺中(Loc43)	高知空港拡張に伴う遺外整備事業に係る試掘調査			外堀南西角	土師質土器・彫札(大友年号)	高知県教育委員会「田村遺跡群」	
1979～1983	横手(Loc34)池	高知空港拡張に伴う本発掘調査				土師質土器・瓦質土器・灰磁陶磁器・貿易陶磁器	高知県教育委員会「田村遺跡群」	
1997.5～1997.6	二本松(A4区)	高知空港再拡張に伴う本発掘調査		6条	外堀(AASD406)	土坑26	弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器	師高知風文化財財団「田村遺跡群」
2000.6～2006.8	桂昌寺中(A10E)	高知空港再拡張に伴う本発掘調査		11条		土坑11・土塁	弥生土器・土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器	師高知風文化財財団「田村遺跡群」
2002.7.8～2002.7.23	桂昌寺中他(細勝寺跡地)	高知空港周辺移転用地整備工事に伴う試掘確認調査		1条		土坑1・土塁	弥生前期土器	南国市教育委員会
2003.6.30～2003.7.8	西門	民間開発に伴う試掘確認調査						南国市教育委員会
2004.10.4～2004.11.5	比恵院・東門(04-01T)	重要遺跡確認調査(第1次調査)					弥生土器・須恵器・陶磁器	南国市教育委員会
2005.2.2～2005.2.14	二本松・市場(04-02T)	重要遺跡確認調査(第2次調査)					弥生土器・陶磁器	南国市教育委員会
2005.9.26～2005.11.24	市場・城(05-03T)	重要遺跡確認調査(第3次調査)		5条	外堀南辺・内堀西辺		弥生土器・陶磁器	南国市教育委員会
2006.10.18～2006.11.10	城(06-04T)	重要遺跡確認調査(第4次調査)		9条	内堀西辺・北辺	土坑1	弥生土器・土師器・陶磁器・瓦質土器・青磁・白磁・李朝	南国市教育委員会
2007.2.7～2007.2.23	市場・西門(06-05T)	重要遺跡確認調査(第5次調査)		4条		土坑2・ビッド10	弥生土器・白磁・須恵器	南国市教育委員会

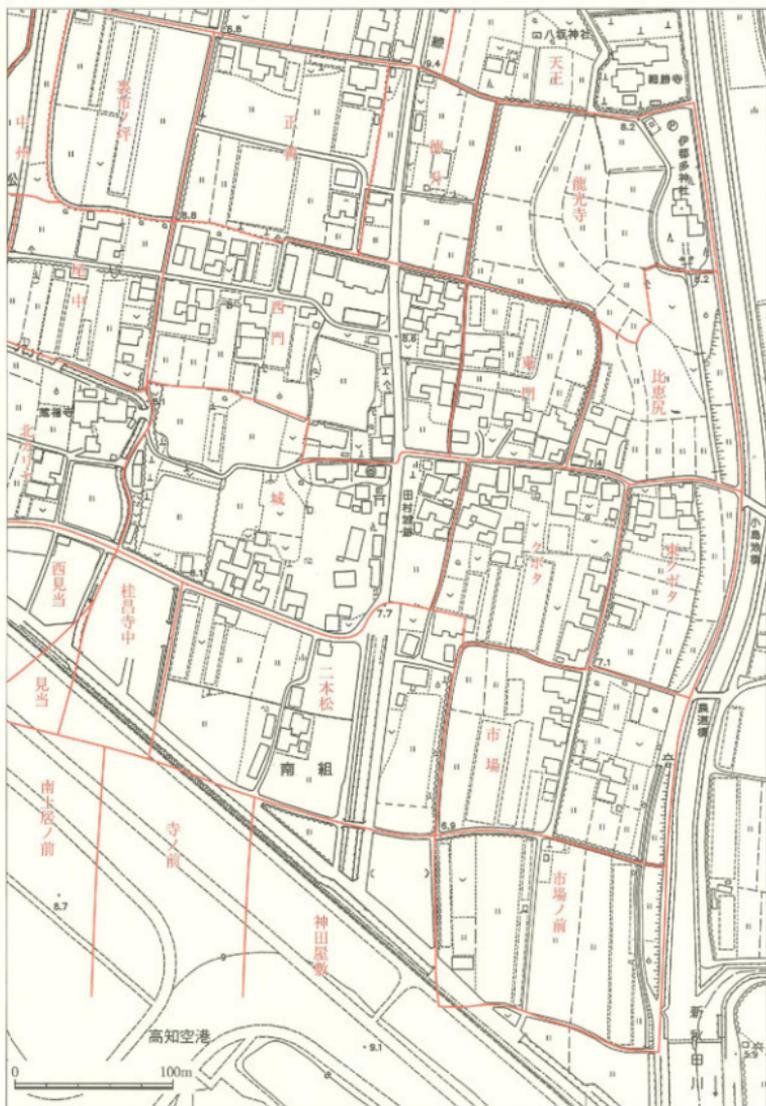


图2 田村城跡地名図

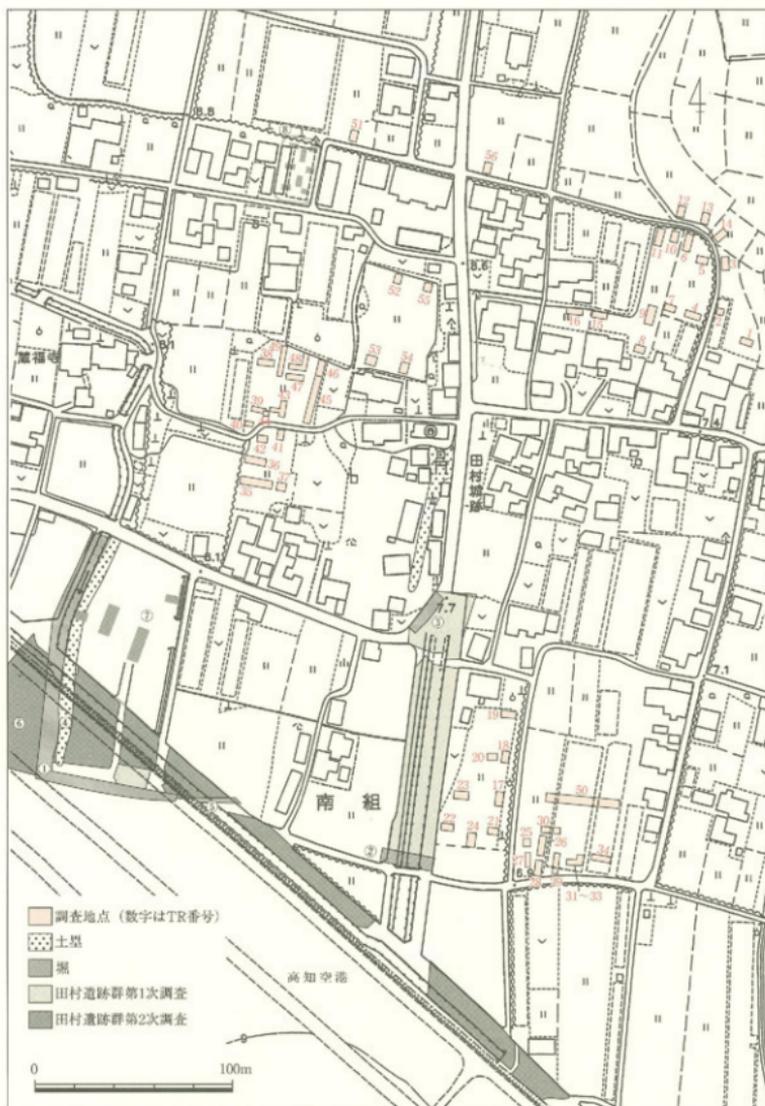


图3 田村城跡調査地点位置图

第Ⅱ章 周辺の地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

田村城跡の所在する南国市は、北緯33度34分、東経133度38分に位置し、東西約12km、南北約23km、面積125.35km²を測る。東西に長い弓状の海岸線を有する高知県のほぼ中央部にあたり、高知市の東隣、人口は約5万人を有する。主な産業は農業であり、かつては米の二期作の中心地であった。国の減反政策もあり二期作は行われなくなったが、7月の中旬には刈り入れを始める早場米の産地として知られている。海岸部では施設園芸が盛んなほか、十市のヤマモモ、白木谷の四方竹などの特産品も有名である。近年、高知空港の拡張、高速道路の延伸、阿佐線の整備、高知新港の開港など高知県の物流拠点都市としての役割のほか、高知市のベットタウンとしても発展してきている。

市域の北半分は四国山地より連なる山地で占められる。その大部分は古生代ペルム紀の上八川層と白木谷層によって形成される。市域の北境界線付近では、上八川層の標高は約800mに達するが、南下するに従って次第に高度を下げ、白木谷層では標高300～400mとなり、やがて標高150m前後の丘陵となって、ついには平野に没してゆく。

市域の南半分を占める平野部は、物部川や国分川・舟入川の堆積作用により形成された扇状地であるが、高知平野の東部を占め、長岡郡と香美郡にまたがることから香長平野とも呼ばれている。香長平野は、舟入川を境に北側を古期扇状地、南側を新期扇状地に二分できる。古期扇状地は洪積世の最終水期に形成された礫層堆積物でおおわれており、長岡台地と呼ばれている。土佐国衙跡や土佐国分寺跡、比江庵寺跡などは長岡台地上に立地している。一方、新期扇状地は物部川の堆積作用による沖積平野であり、香長平野の大部分を占める。ここでは自然堤防がよく発達し、その上には南四国における弥生時代の拠点集落である田村遺跡群をはじめ、弥生時代の集落跡が多数分布している。

2. 歴史的環境

南国市は洪積平野と沖積平野を有し、古くから人々の生活に適した地であった。その営みの痕跡である遺跡の数は280余りにのぼる。これは高知県の遺跡総数の約1割を占め、県下で最も遺跡の分布が集中する地域である。平野部を中心に旧石器時代以降の各時代の遺跡の存在が知られており、それぞれの時代について概観する。

旧石器時代の高知平野周辺は、南国市との境である高知市介良の高間原古墳群1号墳の石室流入土中より出土した1点の細石器が知られるのみであり、「旧石器の空白地帯」と称されるほどその様相はほとんど判明していなかった。平成6～8年に四国横断自動車道の建設に伴う発掘調査が行われた奥谷南遺跡（南国市岡豊町）において、細石刃400点、細石核150点、ナイフ形石器50点などが出土し、旧石器時代の遺跡の存在が明らかになった。

縄文時代の遺跡は、県西部の四万十川流域に比べて少なく、数ヶ所が確認されているにすぎない。奥谷南遺跡では草創期～中期の土器、中期末の堅果類の貯蔵穴が出土した。奥谷南遺跡の南麓である栄エ田遺跡（南国市岡豊町）からは、後期初頭～晩期終末の土器と共に30点程の磨製石斧が出土

した。これらの遺跡は、丘陵部が平野部に接する地に立地しており、狩猟・採集に適した地域である。平野の南部では、田村遺跡群（南国市田村）の第1期調査（1980～1983年）で後期の彦崎KI式土器が、第2期調査（1997～2000年）で鐘崎式土器が出土し、九州との関連が窺えるが、集落跡は見されていない。

弥生時代になると、遺跡数とその規模は急激に発展する。稲作に適した広大な沖積平野を有することから、平野部のほぼ全域に遺跡が展開している。なかでも田村遺跡群は、その規模において群を抜いており、高知平野における拠点的母亲集落と考えられる。第1期調査では前期初頭の集落跡と小区画水田跡、中期末から後期前半の集落跡が出土し、検出された竪穴住居跡は60棟、掘立柱建物跡も14棟にのぼる。第2期調査では前期の環濠集落と中期末～中期前半の集落、中期後半～後期中葉の集落が移動を伴って変遷している様子が確認された。検出された竪穴住居跡は453棟、掘立柱建物跡は198棟にのぼる。田村遺跡群周辺の地域や中小河川流域では、前期後半～末葉にかけて小規模ながら大篠小学校校庭遺跡（南国市大篠）、栄工田遺跡、岩村遺跡（南国市福船）などの遺跡が散見されるようになる。中期になると遺跡数は一転して激減し、特に中期前半の遺構は高知平野ではほとんど見られなくなり、田村遺跡群で土坑や竪穴住居が少数確認されているのみである。中期後半～後期中葉にはピークを迎えた田村遺跡群が衰退する一方、周辺部にあたる東崎遺跡（南国市東崎）、岩村遺跡、小龍遺跡（南国市岡豊町）などの中小集落が後期中葉から終末にかけて成立し、高知平野一帯に爆発的に展開していく。

古墳時代の高知平野における前期古墳は、その存在が全く知られてなかった。平成6年の四国横断自動車道に伴う長畝古墳群（南国市岡豊町）の調査で、同一丘陵上から4世紀前半・5世紀後半・6世紀前半の古墳（長畝2～4号墳）が確認された。後期古墳は、南国市岡豊町・久礼田・植田の平野と接する丘陵部が高知県最大の密集地である。なかでも小蓮古墳は県下最大の横穴式石室をもつ円墳であり、香長平野北部を中心とする有力豪族の墳墓と考えられる。22基の古墳からなる県下最大の群集墳である舟岩古墳群もこの地域に築造されている。集落は、弥生時代後期終末から引き続き営まれる古墳時代初頭の集落が香長平野で数多く調査されている。古墳時代中期以降の調査例は少ないが、土佐国衙跡（南国市比江）ではこれまでの調査で42棟の竪穴住居跡が出土している。

古代の律令制度のもとでの土佐国を伝える遺跡として、土佐国衙跡や比江廃寺跡、土佐国分寺跡が所在しており、古代土佐の政治・文化の中心地であったことを示している。土佐国衙跡では、昭和54年から31次にわたる確認調査が行われ、官衙を構成すると考えられる掘立柱建物群などが検出されているが、政庁などの国衙中核の遺構は確認できていない。土佐国衙跡の北方1kmに位置する白猪田遺跡（南国市久礼田）では地鎮祭祀の跡や緑釉輪花皿が出土し、「国府集落」としての性格づけがなされている。比江廃寺跡（南国市比江）は白鳳時代の寺院跡であり、現存している塔心礎は原位置を保っていることが発掘調査により確認された。土佐国分寺跡（南国市国分）では現状変更に伴う調査および伽藍配置確認のための調査が行われ、礎石建物跡、掘立柱建物跡などが検出されている。

中世になると遺跡数も増加し、分布も平野部の城館跡や山麓部の山城跡などほぼ全域にわたる。現在確認されている南国市内の中世城館跡は47ヶ所にのぼる。これらに伴い生活域も拡散し、現在

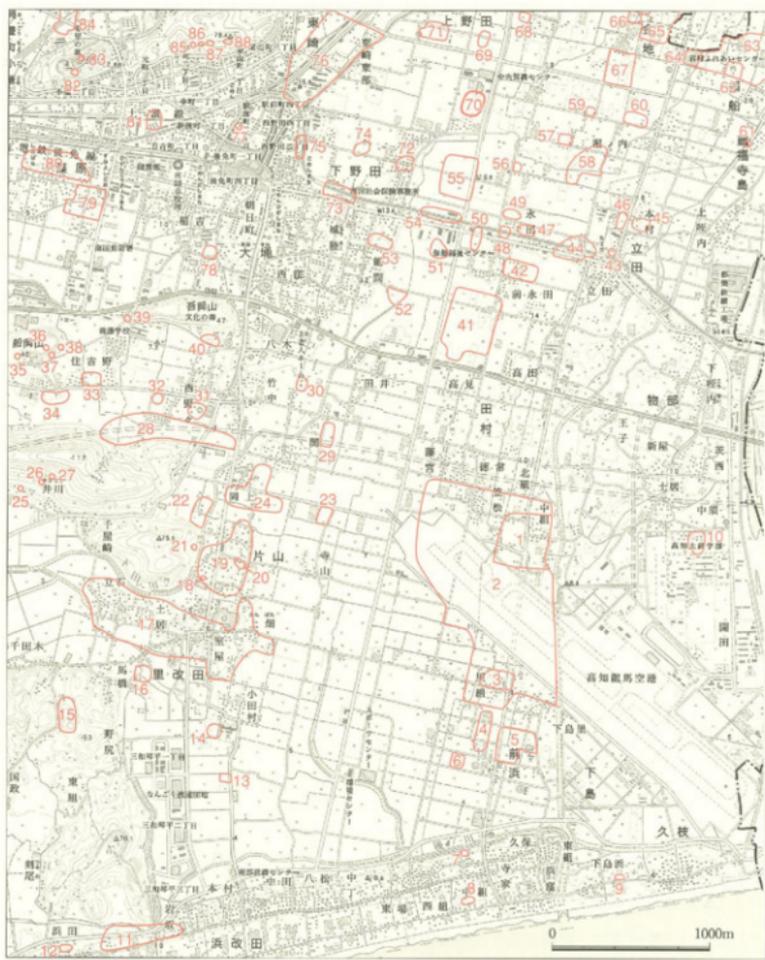
我々が目にするような景観の基礎がほぼ形成された。長宗我部氏の居城であった岡豊城跡は、詰・二ノ段・三ノ段などから礎石建物跡が検出され、史跡公園として整備されている。岩村土居城跡(南国市福船)では城を囲む2重の堀が発掘された。この堀は出土遺物から14～15世紀に機能していたと考えられる。田村城跡は14～15世紀の細川氏の居館と伝えられている。確認されている外濠の幅は4～5m、深さ3.5mを測り、この中からは土師質土器や護符が出土している。高知空港拡張に伴う田村遺跡群発掘調査では、田村城跡の南側に溝に囲まれた屋敷跡が31ヶ所検出されており、南北朝に機能したもの、守護代細川氏の入部後に機能したもの、長宗我部氏の台頭期に機能したものの3時期に区分することができる。

近世以降、山内氏の土佐入国による高知城築城以降、土佐の中心地は高知市域に移った。長岡台地は当時未墾の荒地であったが、藩政初期の野中兼山による新田開発の際、諸役・諸税御免として入植を奨励し、御免町が生まれた。今は後免と改められ、南国市の中心街となっている。

近年戦争遺跡を平和学習に積極的に活用していこうという動きが全国的に見られるなか、陣山遺跡では海軍の送信所跡地が発掘され、砲弾類が多数出土した。また南国市前浜には、旧高知海軍航空隊所属の飛行機の格納庫であった掩体壕が残存しており、平成18年2月に南国市史跡として指定をされた。

(参考文献)

- 『南国市史 上巻・下巻』南国市教育委員会 1979
- 松村信博『奥谷南遺跡Ⅰ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999
- 松村信博『栄エ田遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995
- 『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』高知県教育委員会 1986
- 『田村遺跡群Ⅱ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004
- 三谷民雄『岩村遺跡群Ⅳ』南国市教育委員会 1999
- 出原恵三『小籠遺跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997
- 廣田佳久・池澤俊幸『長畝古墳群 高知自動車道(南国～伊野)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996
- 『土佐国術跡発掘調査報告書 第1～11集』高知県教育委員会・南国市教育委員会 1980～1991
- 三谷民雄『白猪田遺跡』南国市教育委員会 1997
- 山本哲也『土佐国分寺跡 第1～3次発掘調査概報』南国市教育委員会 1988～1991
- 宅間一之『高知県南国市 中世城館跡』南国市教育委員会 1985
- 三谷民雄『岩村遺跡群Ⅲ』南国市教育委員会 1998
- 森田尚宏・松田直則・岡本桂典『岡豊城跡』高知県教育委員会 1990
- 出原恵三・吉成承三・浜田恵子・佐竹 寛『陣山遺跡、陣山北三区遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997
- 浜田恵子他『小籠遺跡Ⅲ』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1997



番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	田村城跡	16	原改田十時城跡	31	曙の新道跡	46	北角田道跡	61	ササノ川道跡
2	田村道跡	17	原改田道跡	32	神田道跡	47	大宮道跡	62	岩村土居城跡
3	千福城跡	18	鹿光台遺跡	33	風戸道跡	48	平島道跡	63	岩村道跡
4	季成道跡	19	中船道跡	34	伊予古道跡	49	上横田道跡	64	若宮道跡
5	河内田道跡	20	片山上層城跡	35	住吉山2号墳	50	真中内道跡	65	坂辺道跡
6	公家ノ前道跡	21	秋葉山南平古墳	36	住吉山3号墳	51	カントサリ道跡	66	宝亀土居城跡
7	中船道跡	22	西ノ芝道跡	37	住吉山1号墳	52	鏡ノ上道跡	67	芝田道跡
8	原改田台跡	23	東林道跡	38	住吉山4号墳	53	メヌル道跡	68	宝亀土居城跡
9	新王土知村新古之集落	24	岡の上遺跡	39	吉河内古栗	54	松野ノ内道跡	69	蓮ノ内道跡
10	日高川原中環濠古墳群	25	馬野古墳	40	香海山古道跡	55	橋津道跡	70	スロカ内道跡
11	谷北道跡	26	舟形山2号墳	41	野原田道跡	56	堀本内道跡	71	シロイ鼻道跡
12	高田道跡	27	舟形山1号墳	42	高島道跡	57	石海道跡	72	新田土居城跡
13	船形白土宮城跡	28	西野ノ遺跡	43	越原上層城跡	58	古賀首道跡	73	門田道跡
14	城ノ尾道跡	29	原野田屋跡	44	キノ曹道跡	59	原野田道跡	74	野中道跡
15	三ツ城跡	30	八木上層城跡	45	立田土居城跡	60	芝ノ尾道跡	75	カ下道跡

図4 田村城跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅲ章 調査の成果

1. 第1次調査 (04-01TJ)

(1) 概要

第1次調査は平成16年10月4日～平成16年11月5日まで行った。調査区は田村城跡の城域推定範囲の北東角にあたり、調査区の北側から東側には蛇行した旧秋田川の痕跡が段丘状に地形に残る。現在も逆し字状の道路があり、地形的にも道路が外堀に沿って造られている可能性があり、外堀の北東角部が想定される。また、外堀北辺は現地形から南北2ヶ所のラインが想定されている。そこで、外堀北東角が想定される道路周辺にトレンチを設定し、南側の外堀北辺想定ライン上にもTR 1・4・7～9・15・16を設定した。調査面積は252㎡である。

(2) 調査成果

各トレンチより土師器、須恵器、陶器などの細片が僅かに出土したのみである。遺構は検出できなかった。

TR 1

調査区南東部にあたる道路東側に設定した。表土を除去すると暗褐色粘質シルト層(Ⅲ層)が約80cm堆積する。Ⅲ層より土師器細片が出土した。

TR 2

調査区南側の道路東側に設定した。表土直下で基底礫層と思われる人頭大の円礫を多く含むぶい黄褐色砂礫層となった。表土から土師器細片が出土した。

TR 3

TR 2北側に設定した。表土直下で基底礫層と思われる人頭大の円礫を多く含むぶい黄褐色砂礫層となった。表土から土師器細片が出土した。

TR 4

調査区南側の外堀北辺想定ラインにあたる道路西側に設定した。表土直下で基底礫層と思われる拳大の円礫を多く含む黄灰色砂礫層となった。遺物は出土しなかった。

TR 5

調査区北側の道路コーナー部分内側に設定した。表土直下で黒褐色砂礫層となった。表土から土師器と須恵器の細片が出土した。

TR 6

TR 5の西側に設定した。表土下は黒褐色粘質土層が約20cm堆積し、弥生土器片が4点出土した。以下は、ぶい黄褐色の粘質土と砂層が互層に約80cm堆積し、拳大の円礫を多量に含む黒褐色砂礫層となった。

TR 7

TR 4の西側に設定した。表土直下で拳大の円礫を多く含む褐色砂礫層となった。遺物は出土しなかった。

TR 8

TR 9の南側に設定した。表土直下で拳大の円礫を多く含む褐灰色砂礫層となった。遺物は出土しなかった。

TR 9

TR 7の西側に設定した。表土直下で黒褐色砂礫層となった。遺物は出土しなかった。

TR10

TR 6の西側に設定した。表土下は黒褐色粘質土が約20cm、にぶい黄褐色粘質土が約70cm堆積し、褐灰色砂礫層となった。遺物は出土しなかった。

TR11

TR10の西側に設定した。表土下は黒褐色粘質土が約20cm、にぶい黄褐色粘質土が約70cm堆積し、褐灰色砂礫層となった。東に向かって傾斜する堆積状況である。遺物は出土しなかった。

TR12

TR10の北側に設定した。表土下は灰褐色粘質土層が約60cm、にぶい黄褐色粘質土層が約40cm堆積し、拳～人頭大の円礫を多量に含むにぶい黄褐色粘質土となった。土師器と須恵器の細片が数点出土した。

TR13

TR12の東側に設定した。表土下は灰褐色粘質土層が約60cm、にぶい黄褐色粘質土層が約60cm堆積し、拳～人頭大の円礫を多量に含むにぶい黄褐色粘質土となった。土師器と須恵器の細片が数点出土した。

TR14

TR13の東側に設定した。表土下は灰褐色粘質土層が約70cm、にぶい黄褐色粘質土層が約90cm堆積し、拳～人頭大の円礫を多量に含むにぶい黄褐色粘質土となった。遺物は出土しなかった。

TR15

TR 9の西側に設定した。表土直下で拳～人頭大の円礫を多く含む褐灰色砂礫層となった。遺物は出土しなかった。

TR16

TR15の西側に設定した。表土下はにぶい黄褐色粘質土が約30cm、黒褐色粘土層が10cm、にぶい黄褐色粘質土が約40cm堆積し、拳大の円礫を多く含む褐灰色砂礫層となった。遺物は出土しなかった。

2. 第2次調査 (04-02J)

(1) 概要

第2次調査は平成17年2月2日～平成17年2月14日まで行った。調査区は田村城跡の城域推定範囲の南東部にあたり、外堀東辺が想定される場所である。9カ所のトレンチを設定した。調査面積は81㎡である。

(2) 調査成果

各トレンチより弥生土器片や陶磁器片が出土した。遺構はTR25で溝を1条検出したのみである。

TR17

調査区東側道路の西側に設定した。表土下は灰黄褐色砂層が約10cm、灰黄褐色粘質土が約110cm堆積し、基底礫層となった。遺物は出土しなかった。

TR18

TR17の北側に設定した。表土下は褐灰色砂質土が約50cm堆積し、拳～人頭大の円礫を多く含む褐灰色砂礫層となった。表土から弥生土器と土師器の細片が出土した。

TR19

調査区の北端部に設定した。表土下はにぶい黄褐色粘質土が約20cm堆積し、拳～人頭大の円礫を多く含む褐灰色砂礫層となった。遺物は出土しなかった。

TR20

TR18の西側に設定した。表土下はにぶい黄褐色粘質土が約20cm、黒褐色砂が約20cm堆積し、拳～人頭大の円礫を多く含む褐灰色砂礫層となった。陶磁器細片が出土した。

TR21

調査区南端東側に設定した。表土下はにぶい黄褐色粘質土が約10cm、黒褐色砂が約30cm堆積し、拳～人頭大の円礫を多く含む褐灰色砂礫層となった。

TR22

調査区南端西側に設定した。表土下は拳大の円礫を多く含む褐色又は褐灰色の粘質土が約30cm堆積し、黒褐色砂礫層となった。土師器と須恵器片が出土した。

TR23

調査区中央西寄りに設定した。表土下は黒褐色粘質土が約10cm、褐色粘質土が約10cm、黒褐色荒砂が約10cm堆積し、黒褐色砂礫層となった。遺物は出土しなかった。

TR24

調査区南端に設定した。表土下はにぶい褐色粘質土が約30cm堆積し、黒褐色砂礫層となった。土師器と陶磁器の細片が出土した。

TR25

調査区東側南端に設定した。表土下は黒褐色粘質土が約30cm、褐色粘質土が約30cm堆積し、黄灰色砂層となる。IV層上面で東西方向に延びる溝1条を検出した。検出プランから、西側は北方向に屈曲または北方向に分岐する可能性がある。検出幅約40cm、深さ約50cmを測る。断面形状は北肩部分のみの検出のため不明であるが、急斜度で掘り込まれている。埋土中に拳大の円礫を含む。

61275

61270

61265

61260

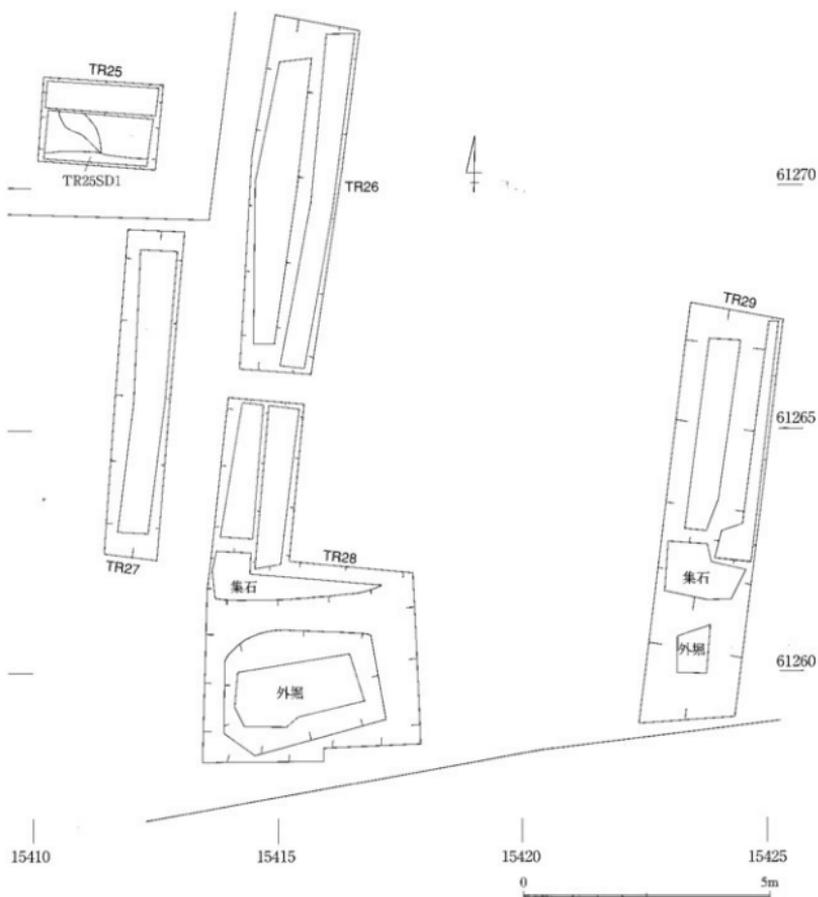


图5 TR25~29遺構平面图

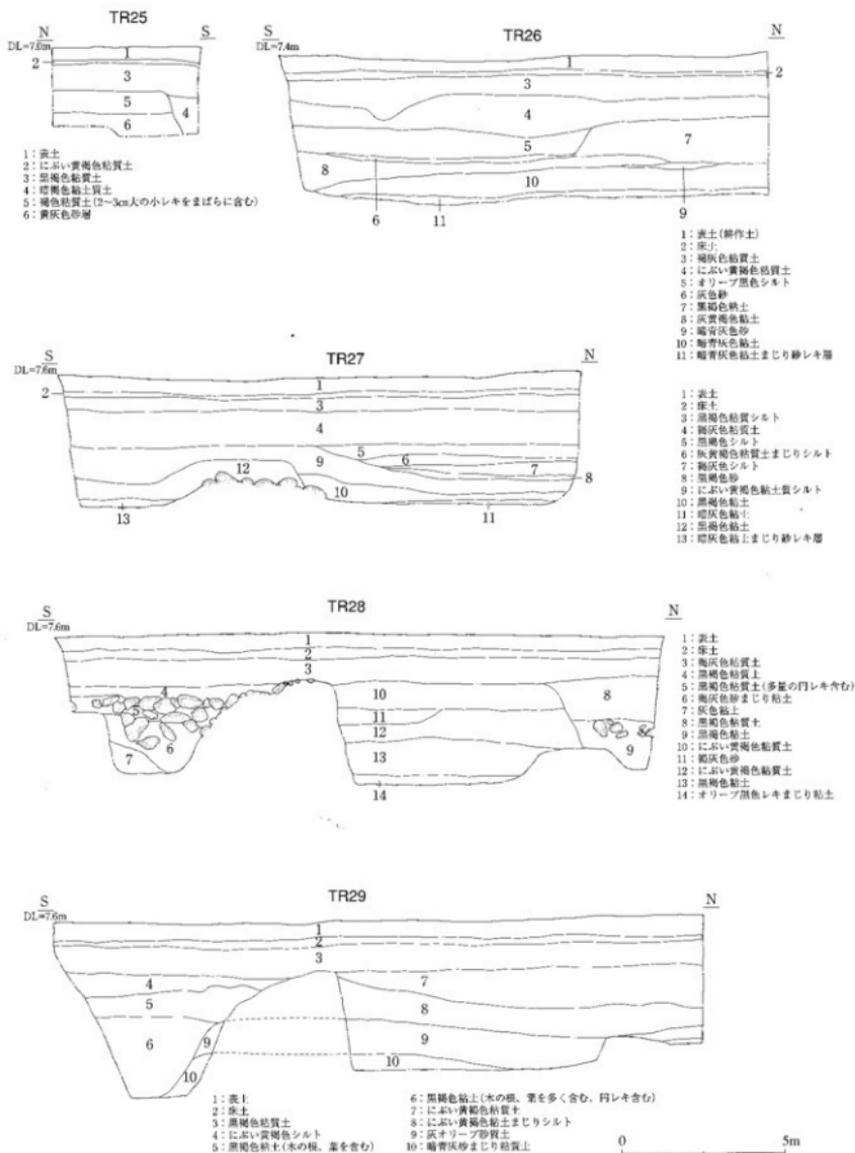


図6 TR25~29セクション図

3. 第3次調査 (05-03TJ)

(1) 概要

第3次調査は平成17年9月26日～平成17年11月17日まで行った。調査区は田村城跡の域域推定範囲の南東部及び内郭部である。12カ所のトレンチを設定した。調査面積は200㎡である。

(2) 調査成果

調査区南東部では、外堀南辺と思われる南北方向の溝と外堀に伴う集石及び南北方向の溝を1条検出した。また、内郭部では内堀西辺と思われる溝と南北方向の溝1条を検出した。

TR26

第2次調査で検出したTR25SD1の延長を確認するためにTR25の東側に設定した。土層断面からは粘質土層と砂層が互層となるレンズ状の堆積が見て取れるのみで、TR25SD1の延長と思われる遺構は検出できなかった。

TR27

TR25の南側に設定した。表土下約1.3mに人頭大の円礫が集中して検出した。土層断面から集石の上部に台状の地形を確認した。台状の部分には版築の痕跡はなく、土塁等の構造物の基礎とは考えられず、集石は基底礫層の高まりが露出したものと思われる。台状地形の南側では、シルトと粘質土が互層となるレンズ状の堆積を確認できるため、溝又は流路の間の微高地部分と思われる。

TR28

TR26の南側に設定した。東西方向の溝2条を検出した。南端部の溝は北側に集石を伴い、田村遺跡群第1次調査のLoc.43南端で確認された外堀の延長線上に位置することから、外堀南辺と思われる。外堀の検出面は表土下約60cmで、北肩部分の検出である。検出幅2.7m、深さ約1.1m以上を測る。埋土上部には北側の集石が崩れ込んだように人頭大の円礫が集中する。下層には木の葉や木の根などの植物遺体を多く含む。埋土中から土師器鍋1点と播鉢1点が出土したが図示し得るものはなかった。

北端部の溝 (TR28SD1) は南肩部分の検出で、急斜度で掘り込まれる。埋土は暗褐色粘土で、拳大の円礫を多く含む。埋土から播鉢、土師器鍋が出土した。土師器鍋 (図21-12) は白い発色の精選された胎土で上脣部に釣り手が貼付される。

TR29

TR28の東側に設定した。外堀南辺の北肩部分を表土下約60cmで検出した。掘方の上部に段を持ち、検出幅2.8m、深さ0.8m以上を測る。埋土に木の葉や木の根などの植物遺体を多く含む。拳から人頭大の円礫をわずかに含む。埋土から備前焼片が出土したのみである。

TR30

TR28の北側に設定した。暗褐色又はにぶい黄褐色の粘質土と砂質土が互層に水平堆積する。遺構は検出できず、表土から土師器、備前焼、青花片がわずかに出土したのみである。

TR31

TR29の東側に設定した。東端部の表土下約40cmで弧状の集石遺構を検出した。調査地点の制限から下層の確認が出来なかったが、TR28・29で検出した外堀の北側に沿う集石の可能性はある。

TR32・33

TR31の東側に集石の延長を確認するために設定した。集石は北側に弧状に延びていることを確認した。また、約30cm下層にも内側に並行する弧状の集石を検出した。

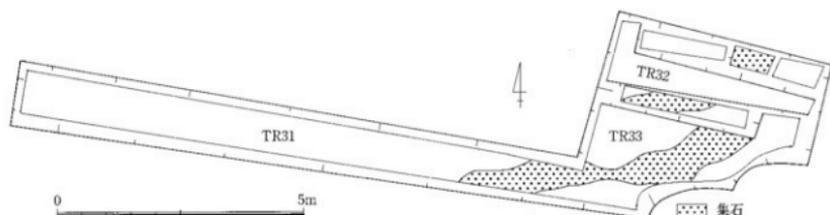


図7 TR31～33遺構平面図

TR34

TR32の東側に外堀東辺を想定して設定した。外堀と思われる遺構は検出できず、南北方向に延びる溝1条 (TR34SD1) を確認した。断面形状は上部に段を持って緩やかに広がる逆台形で幅約5.4m、深さ1.3mを測る。埋土の状況から水が流れた痕跡は見られなかった。遺物は出土しなかったため、機能した時期は不明である。

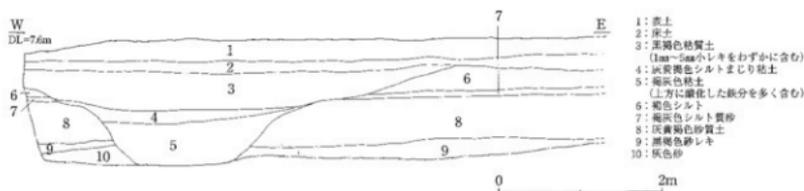


図8 TR34セクション図

TR35

内堀西辺が想定される地点に設定した。南北方向の溝2条を検出し、西側の溝は内堀西辺と思われる。西側に農道と水路があるため、西屑は確認できず、検出幅で約7.0mを測る。上部は後世の攪乱を受け、焼土や人頭大の円礫が混じる。埋土は西側水路の浸透水の影響を受け西側ほどグライ化が著しい。多量の植物遺体を含む暗灰色粘土で、備前焼1点が出土した。

東側の溝 (TR35SD1) は一部を後世の攪乱に壊されているが、掘方に段を持つ丸底で幅約2.7m、深さ約1.2mを測る。埋土の状況から、ある時期に一気に埋められたと思われる。遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

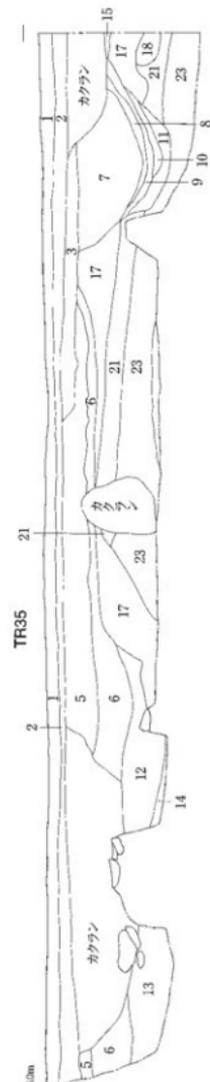
TR36

W
D_r = 8.0m



- 1: 表土・粘土
- 2: 黒褐色粘質土 (田舎プロック、1-3m次の小石・堆石含む)
- 3: 黒褐色粘質土
- 4: 黒褐色粘質土
- 5: 黒褐色粘質土
- 6: 黒褐色粘質土
- 7: 黒褐色粘質土 (頂ほどグライ化強い)
- 8: 黒褐色粘質土 (頂ほどグライ化強い)
- 9: 黒褐色粘質土 (頂ほどグライ化強い)
- 10: 黒褐色粘質土
- 11: 黒褐色粘質土
- 12: 黒褐色粘質土

W
D_r = 8.0m



- 1: 表土
- 2: 黒褐色粘質土
- 3: 黒褐色粘質土
- 4: 黒褐色粘質土
- 5: 黒褐色粘質土
- 6: 黒褐色粘質土
- 7: 黒褐色粘質土
- 8: 黒褐色粘質土
- 9: 黒褐色粘質土
- 10: 黒褐色粘質土
- 11: 黒褐色粘質土
- 12: 黒褐色粘質土
- 13: 黒褐色粘質土
- 14: 黒褐色粘質土
- 15: 黒褐色粘質土
- 16: 黒褐色粘質土
- 17: 黒褐色粘質土
- 18: 黒褐色粘質土
- 19: 黒褐色粘質土
- 20: 黒褐色粘質土
- 21: 黒褐色粘質土
- 22: 黒褐色粘質土
- 23: 黒褐色粘質土

(内照壁土)

- 12: 黒褐色粘質土
- 13: 黒褐色粘質土
- 14: 黒褐色粘質土

(SD層土)

- 15: 黒褐色粘質土
- 16: 黒褐色粘質土
- 17: 黒褐色粘質土
- 18: 黒褐色粘質土
- 19: 黒褐色粘質土
- 20: 黒褐色粘質土
- 21: 黒褐色粘質土

(黒山)

- 22: 黒褐色粘質土
- 23: 黒褐色粘質土
- 24: 黒褐色粘質土
- 25: 黒褐色粘質土
- 26: 黒褐色粘質土



図9 TR35・36セクション図

また、トレンチ断面からは暗褐色粘質土層が東に向かって傾斜している堆積状況が確認できた。この暗褐色土層を切るレンズ状の堆積も認められ、自然流路の存在する旧地形を確認できた。

TR36

TR35の北側に設定した。内堀西辺の延長を確認した。西側に農道と水路があり、西肩は確認できず、東肩を擾乱に壊されているが、検出幅約6.4mを測る。TR35と同様に上部は後世の擾乱を受け、円礫と焼土が混じる。埋土は西側ほどグライ化が著しく、植物遺体を多く含む。

TR37

TR35の東側に設定した。田村城跡に関連する遺構は確認できなかった。下層で流路と思われる層を確認した。多量の弥生土器が出土し、復元可能な5点を図示した(図20-2~6)。2・3・4は壺である。2は器壁の薄い作りで口縁部は水平に外反する。口縁外面に粘土帯を貼付しキザミ目を施す。口縁直下に断面三角形の薄い突帯を貼付する。頸部と胴部の境には突帯を簡略化したと思われる沈線を2条施し、間に豆粒状の浮文を貼付する。3は直立した頸部から大きく外反する口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚させ、端部に沈線を2条施す。頸部下端に断面三角形の粘土帯を貼付し、指つまみで押さえる。3は底部片である。5・6は脚付鉢の脚部と思われる。

4. 第4次調査 (06-04TJ)

(1) 概要

第4次調査は平成18年10月18日～平成18年11月10日まで行った。調査区は田村城跡の内郭部にあたる。12カ所のトレンチを設定した。調査面積は180㎡である。

(2) 調査成果

今次調査では、内堀の西辺と北辺を確認することができた。これにより、田村城跡の内郭の範囲をほぼ確定することができた。その他の遺構として、廃棄土坑1基、溝5条を検出した。廃棄土坑からは多量の遺物が出土し、田村城跡の存続時期を検証するうえでの貴重な資料となった。

TR38

調査区北西角部に設定した。田村城跡に関連する遺構は確認できなかった。下層で弥生時代の遺物を含む流路跡を確認し、多量の弥生土器が出土した。復元可能な壺1点を図示した(図20-1)。1は、短い頸部から外反した口縁部外面に粘土帯を貼付し肥厚させる。頸部下端に薄い粘土帯を貼付し、板状工具の先端で斜格子文を施す。

TR39

TR38の南側に設定した。田村城跡に関連する遺構は検出できなかった。

TR40

TR39の南側に設定した。東西方向の溝1条(TR40SD1)を検出した。検出面は表土下約60cmである。南側が道路のため、南肩は確認できず、検出幅約1.4mを測る。サブトレンチの断面観察から掘方の上部に段を持つ。埋土中から備前焼と陶磁器の細片と鶏形土人形1点が出土した。

TR41

TR40SD1の延長を確認するためにTR40の東側に設定した。東西方向の溝は検出できず、T字

形プランの溝1条 (TR41SD1) を検出した。検出面は表土下約30cmである。南北方向の溝の全幅は確認できなかった。検出幅約1.0mを測る。東方向の溝は幅約1.6mを測る。埋土から弥生土器と土師器の細片が出土した。

TR42

第3次調査TR36の北側に内堀西辺の延長を確認するために設定した。表土下約30cmで内堀西辺の東肩を確認した。掘片の上部に段を持つ。埋土から土師器と陶器の細片が出土した。

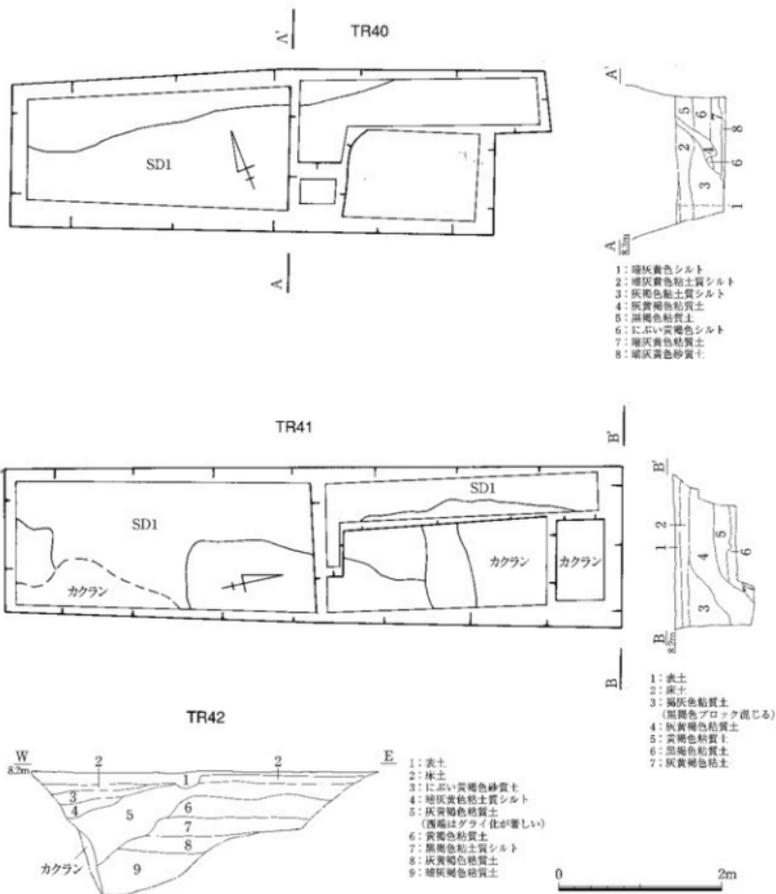


図10 TR40～42遺構平面図及びセクション図

TR43

TR41の北側に設定した。表土下約50cmで南北方向の溝1条 (TR43SD 1) を検出した。幅約4.2m、深さ約0.8mを測る。埋土中から土師器、陶器、陶磁器が出土した。

TR44

TR39西側に設定した。田村城跡に関係する遺構は確認できなかった。

TR45

調査区東端に設定した。田村城跡に関連する遺構は確認できなかったが、溝2条 (TR45SD 1・TR45SD 2) と南端部の下層で弥生土器を含む自然流路を検出した。

TR45SD 1 と TR45SD 2 とも遺物は出土しなかったため詳細な時期は不明であるが、暗褐色土に黄褐色のブロックが混

じる埋土の状況から近現代の溝と思われる。自然流路は弥生土器を含む粘質土と砂層が互層に堆積する。出土した弥生土器片に図示し得るものはなかった。

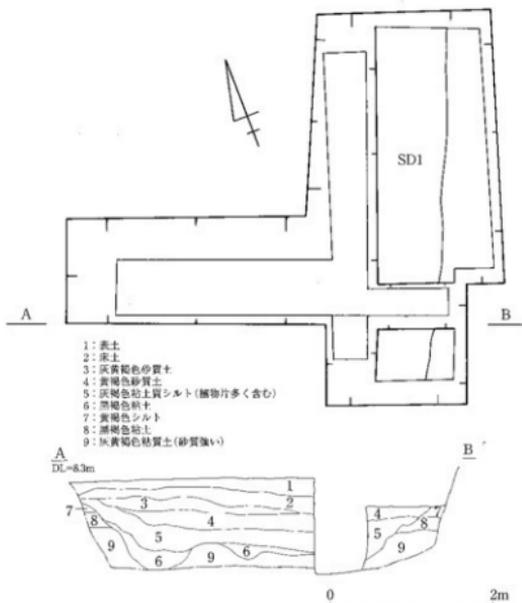


図11 TR43遺構平面図及びセクション図

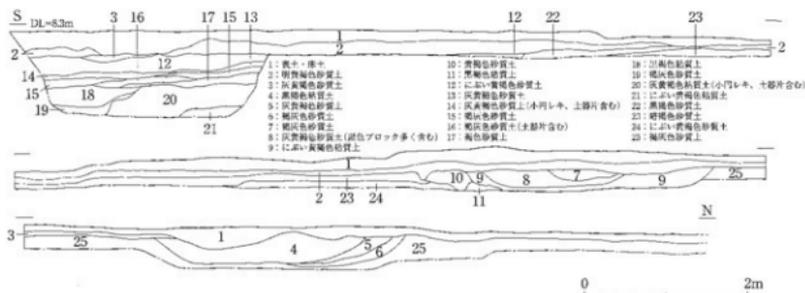


図12 TR45セクション図

TR46

TR45を北に延長する形で設定した。内堀北辺と思われる規模の溝を検出した。北側に水路があるため、北肩は確認できなかったが、検出幅約5.7m、深さ2.2mを測る。掘方に段を持ち、基底砂層まで掘り込まれている。埋土はレンズ状に粘土層、砂質層、粘質土層が互層に堆積する。遺物はほとんど出土しなかった。

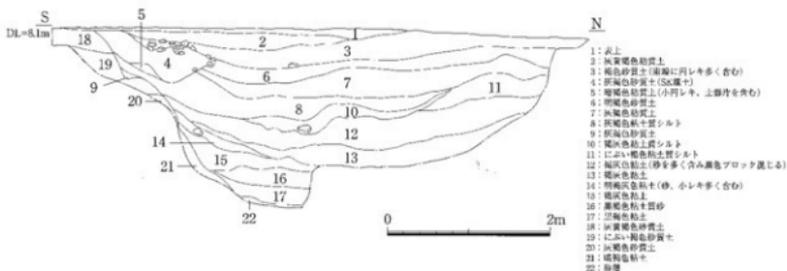


図13 TR46セクション図

TR47

TR43SD1の延長を確認するためにTR43の北側に設定した。溝1条 (TR47SD1) と土坑1基 (TR47SK1) を検出した。

TR47SD1は上部でTR47SK1を検出したため、両肩部分を掘削し、断面で確認をした。幅約5.0m、深さ約1.7m以上を測る。方向と規模からTR43SD1と同一の溝と思われる。

TR47SK1からは、人頭大の円礫、焼土とともに多量の遺物が出土した。調査時にはTR47SD1を切る土坑として取り扱っていたが、TR47SK1周辺のTR47SD1埋土にも焼土が含まれ、プランと掘方も不明瞭であることから、TR47SD1の埋没最終段階のくぼみに若干掘削を加えて廃棄土坑として利用したと思われる。

出土遺物のうち図示し得たのは、土師器 (図21-7~12)、陶器 (図21-13~14)、瓦質土器 (図21-15~21)、青磁 (図22-27~38)、白磁 (図22-39~47)、青花 (図23-48~50)、李朝象嵌青磁 (図24-51) である。この他にも、接合出来なかった同一個体と思われる破片が多くある。

8・9は白色の精選された胎土の土師器皿で、京都系手づくね皿を模倣したものと思われる。10・11は口ロ成形成の土師器碗で、体部は直線的に立ち上がる。12は白色の精選された胎土の土師器鍋で、上胴部に取手を貼付する。13は天目茶碗である。二次焼成を受けているため器壁は瓦質化している。14は瀬戸焼の袴腰形香炉である。15~18は備前焼の壺である。15・16は口縁部を押しつぶした形状の玉縁、17・18は口縁部を折り返した玉縁を持つ。21は常滑焼の甕である。口縁部の縁帯が頸部と僅かな隙間を持って約4cm垂下する。22は火鉢である。口縁は内側に水平に屈曲する。外面に突帯を2条貼付し、その間にスタンプ文を施す。23・24は風炉である。25~27は青磁の椀皿で

ある。全て軸が厚く施される。28は盤の口縁部片、29は稜花盤の口縁部片である。30～32は青磁碗である。32は丸みを持った体部外面に細連弁文を施す。34の高台内は蛇の目に軸を剥ぎ取る。35～37は青磁壺である。36は畳付には軸が施されない。37は壺の裝飾部である。38は香炉で脚の先端が欠く。39～47は白磁の皿である。全てアーチ状高台で見込みに焼成時の横み重ね痕が残る。43は口縁部がわずかに外反する。46・47は端反り皿である。46は見込みがわずかに段を持ってくぼみ、高台から底部は露胎する。47は畳付けから底部が露胎する。48～50は青花皿である。49はいわゆる口鏝である。50は端反りの口縁外面に簡略された雷文帯を施す。51は李朝青磁の壺である。上胴部に白色の象嵌を施す。

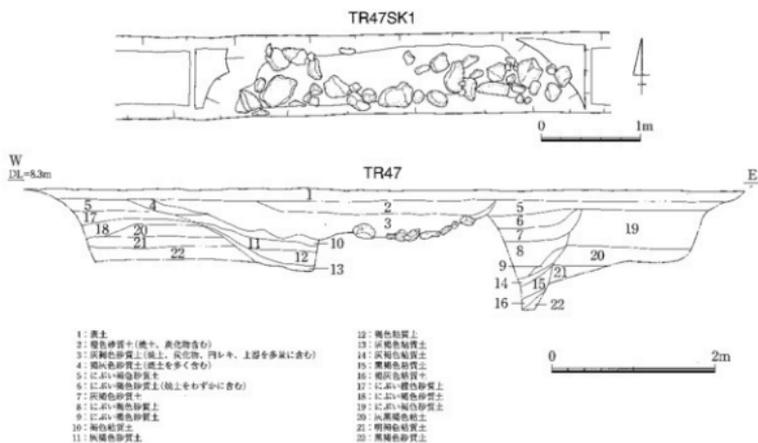


図14 TR47SK1 出土状況図及びTR47セクション図

TR48

TR46の西側に設定した。内堀北辺と南北方向の溝1条 (TR48SD1) を検出した。埋め戻しの関係から内堀の落ち口が確認できる深さまでの掘削にとどめた。北側に水路があるため北層は確認できなかった。検出幅約6.8mを測る。遺物は埋土に土器細片をわずかに含むのみであった。

また、内堀北辺のプラン検出とTR47SD1の延長確認のために、西側に拡張を行った。その結果、内堀北辺のプランは北側水路に沿って若干蛇行気味に西に延びていることを確認した。TR47SD1は検出できなかったため、TR47とTR48の間で途切れるか東西に屈曲すると思われる。

TR48SD1はトレンチの底でプランを、南面で断面を確認した。幅1.6m以上、深さ0.6m以上を測る。掘り込まれた面が内堀よりも深いため、内堀掘削以前の遺構と思われるが、遺物が出土しなかったため機能した時期は不明である。

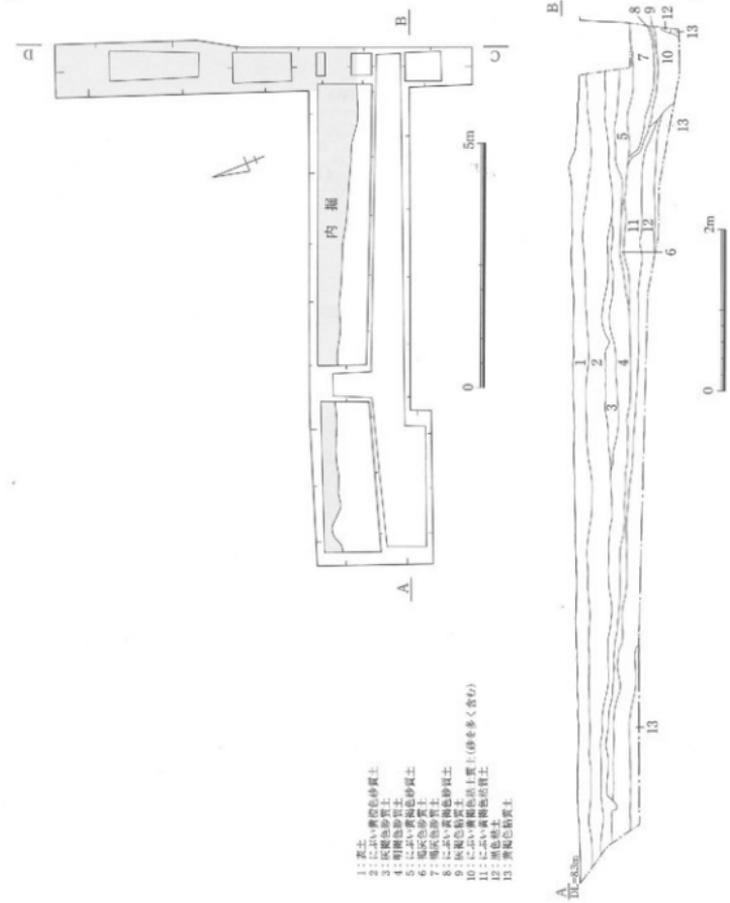
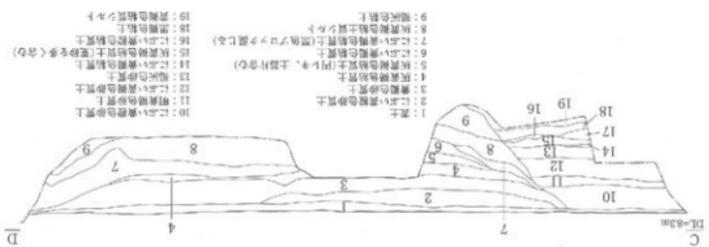


図15 TR48遺構平面図及びセクション図

TR49

TR48西側に設定した。内堀北辺と溝1条（TR49SD1）、下層で自然流路を確認した。TR48と同様に内堀北辺の落ち口が確認できる深さまでの掘削にとどめた。北側に水路があるため、北肩は確認できなかった。検出幅約7.6mである。埋土から土師器鍋、天目茶碗が出土した。

また、TR48で北への延長が確認できなかったTR47SD1が西に曲がって延びる可能性があったため、トレンチを南側に延長したが検出できなかった。南端部のTR49SD1は、断面形状が緩やかな丸底で幅2.4m、深さ70cmを測る。底に土師器片と小円礫を多く含む。

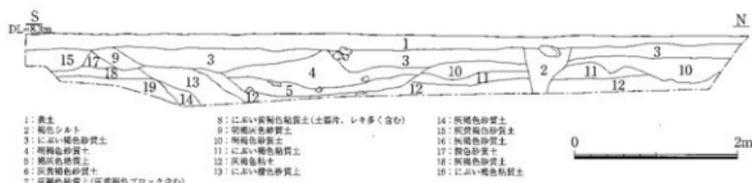


図16 TR49セクション図

5. 第5次調査 (06-05TJ)

(1) 概要

第5次調査は平成19年2月7日～平成19年2月21日まで行った。調査区は田村城跡の外堀南東部、内郭部、外堀北辺想定部にあたる。7カ所のトレンチを設定した。調査面積は144㎡である。

(2) 調査成果

外堀南東部の北への延長、外堀北辺、内堀北辺を確認するために調査可能地にトレンチを設定したが、外堀、内堀とも確認できなかった。

TR50

第3次調査で田村城跡南東部のTR31～33で確認された集石が、外堀の南東角にあたると思定し、北への延長を確認するために、TR31～33の北側に設定した。トレンチ西半分の表土下約40cmで、溝3条（TR50SD1・TR50SD2・TR50SD3）、土坑2基（TR50SK1・TR50SK2）、ピット10個と井戸跡を検出したが、外堀と思われる遺構は確認できなかった。TR50SD1は南北方向の溝で、断面逆台形を呈し、幅2.6m、深さ0.8mを測る。基底礫層まで掘り込まれる。遺物は出土しなかったため、機能した時期は不明である。位置と規模から南側で検出されたTR34SD1と同じ溝である可能性が高い。TR50SD2は南北方向の溝で、幅35cm、深さ30cmを測る。断面逆台形で、西側の掘方は段を持つ。遺物は出土しなかったため、機能していた時期は不明である。TR50SD3は東西方向の溝で、長さ3.3m、幅8～14cm、深さ3～9cmを測る。平面形や底の深さが均一でなく、ピット状のくぼみが数カ所ある。軒下の雨垂れ溝の可能性がある。TR50SK1とTR50SK2は円形又は楕円形のプランを呈する浅い皿状の掘方で、ほとんどがトレンチ外であるため、正確な規模は不明である。埋土は焼土と炭化物が大半を占め、床面は被熱によって赤色化していることからたき火等の浅い掘り込みの跡と思われる。遺物は出土しなかった。ピットは直径25～60cmを測る。狭小な調査

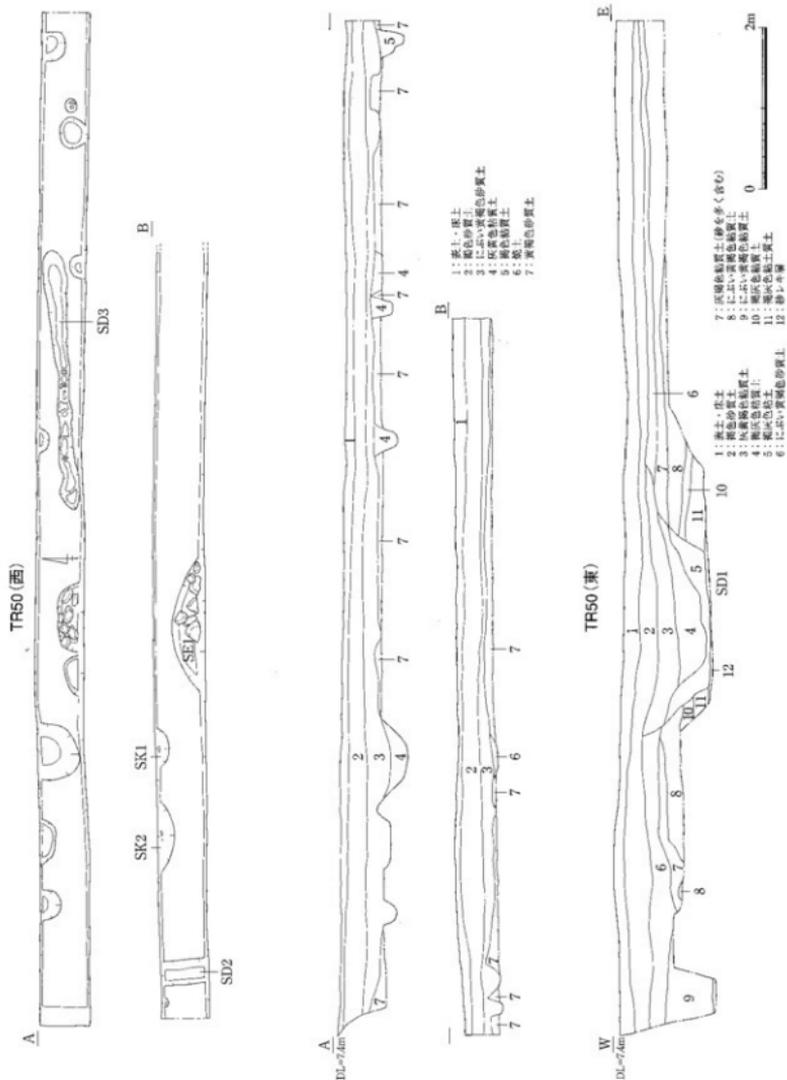


図17 TR50遺構平面図及びセクション図

査範囲のため、建物プランの確認は出来なかった。

井戸跡は表土直下から掘り込まれており、人頭大の円礫が多量に投げ込まれて埋められている。機能した時期は不明である。

TR51

外堀北辺の北側想定ラインの水路北側に設定した。遺構、遺物とも検出できなかった。

TR52

外堀北辺の南側想定ラインの道路南側に設定した。ピット2個を検出した。どちらも直径25cmを測る。埋土から遺物は出土しなかったため、時期は不明である。

TR53

内堀北辺の東側に設定した。性格不明遺構1基（TR53SX1）とピット2個を検出した。TR53SX1の壁面は垂直に近く掘り込まれる。調査時には竈穴住居跡の可能性も考えていたが、埋土中に暗褐色や黄褐色のブロックを多く含むことから、近現代の遺構と思われる。埋土からは土師器や須恵器片が出土した。ピットは表土直下での検出で、埋土から近現代のものと思われる。

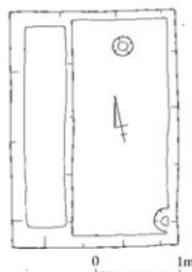


図18 TR52遺構平面図

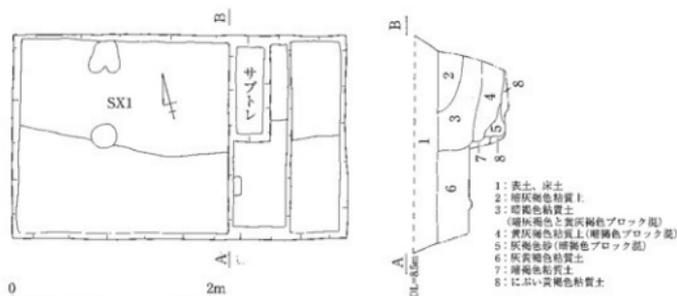


図19 TR53遺構平面図及びセクション図

TR54

TR54の東側に設定した。表土下は暗褐色粘質土が15cm、にぶい黄褐色粘質土が60cm堆積し、灰褐色砂層となる。遺構、遺物ともに検出できなかった。

TR55

TR52の東側に設定した。表土下は鈍い黄褐色粘質土が30cm、灰褐色砂層が25cm堆積し、砂礫層となる。遺構、遺物ともに検出できなかった。

TR56

TR51から県道を挟んだ東側に設定した。表土直下で礫層となり、遺構、遺物ともに検出できなかった。

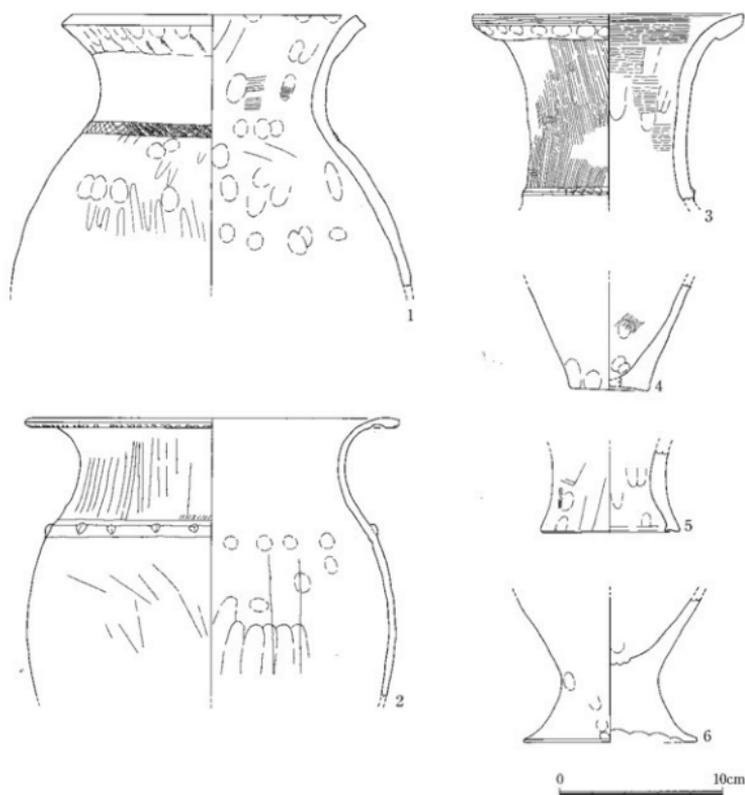


图20 出土遺物(1)弥生土器

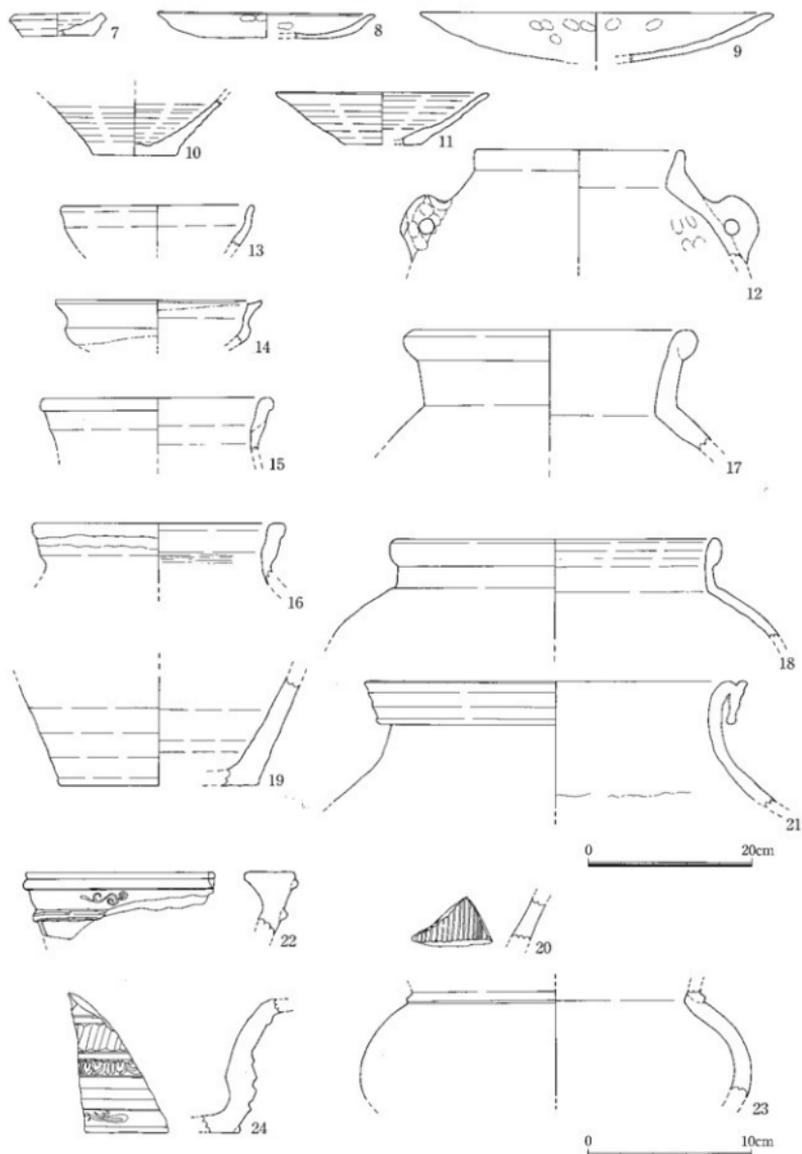


图21 出土遺物(2)土師器・陶器・瓦質土器

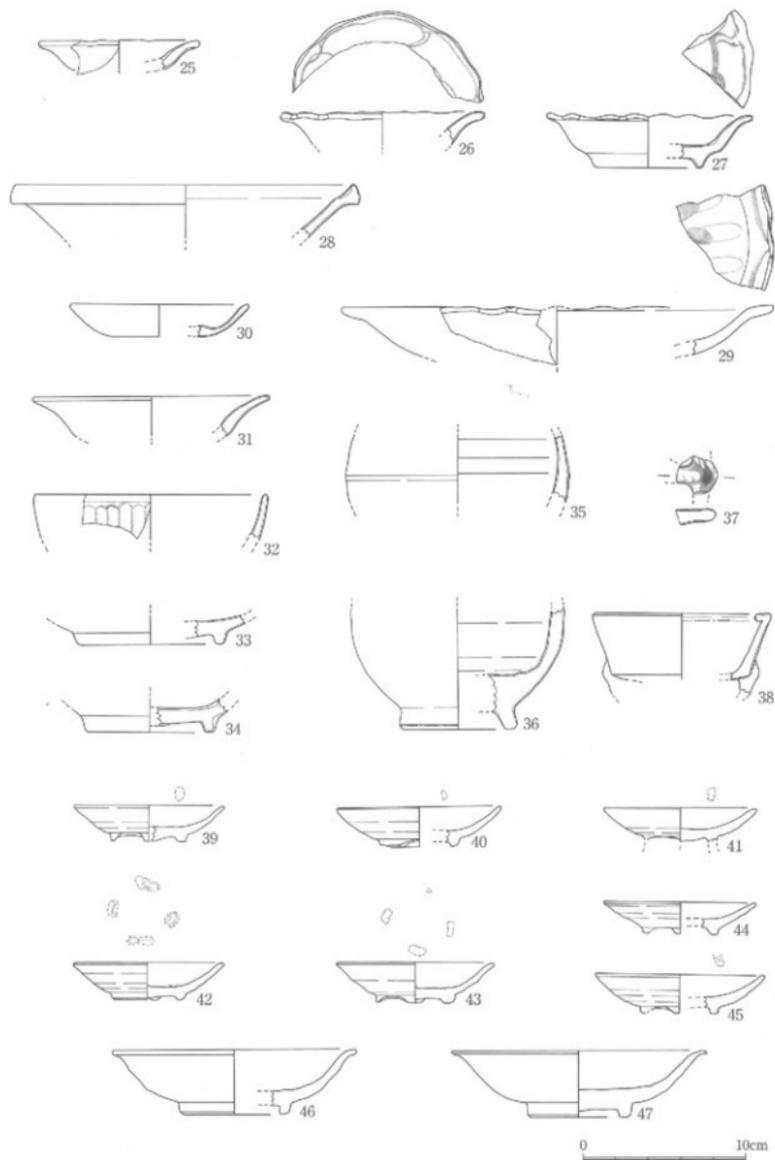


图22 出土遺物(3)青磁・白磁

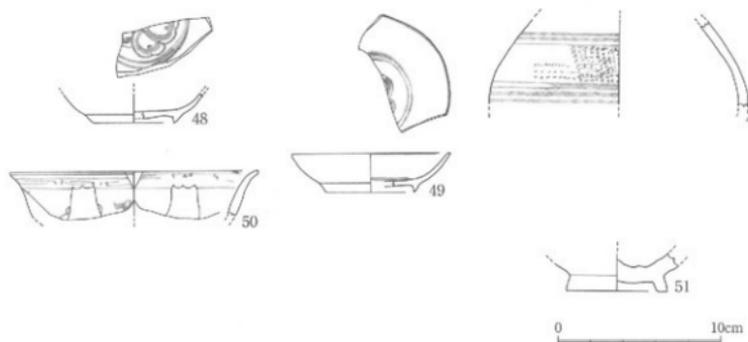


图23 出土遺物(4)青花・李朝青磁

表2 遺物観察表

図版番号	押印番号	調査区	遺構	器種	器形	法量 (cm)				特 徴	備 考
						口径	器高	胴径	底径		
図20	1	TR1		弥生	壺	17.4	(16.2)			口縁部粘土帯貼付肥厚、肩部粘土帯貼付斜格子文、外面彫部ヘラケズリ、頸部ナメ	Ⅲ期後半
図20	2	TR12	Ⅳ層	弥生	壺	23.0	(17.1)			口縁部水平に外反、粘土帯を貼付しキザミ目、肩部沈線で突帯現す、豆粒文貼付、器薄	Ⅲ期後半
図20	3	TR12	Ⅳ層	弥生	壺	16.6	(11.6)			口縁部粘土帯貼付肥厚、頸部ハケ調整、胴部との境に断面三角形の突帯に指跡	
図20	4	TR12	Ⅳ層	弥生	壺				4.8	胎土に5mm程度のチャート角塵含む	底部片
図20	5	TR12	Ⅳ層	弥生	罍					率耗著しく調整不明瞭	脚付鉢か
図20	6	TR12	Ⅳ層	弥生	罍		(9.0)		10.6	率耗著しく調整不明瞭	脚付鉢の脚部片
図21	7	TR47	SK1	土師器	罍	5.4	1.3		4.6	ロクロ成形、胎土に砂粒をほとんど含まない	
図21	8	TR47	SK1	土師器	甕	13.4	1.5			京都系の手づくね、白い発色の精緻な胎土	
図21	9	TR47	SK1	土師器	杯	21.8	3.0			京都系の手づくね、白い発色の精緻な胎土	
図21	10	TR47	SK1	土師器	杯		(3.5)		5.2	ロクロ成形、底部から若干屈曲して直線的に立ち上がる	
図21	11	TR47	SK1	土師器	杯	13.2	3.2		4.8	ロクロ成形、底部から直線的に立ち上がる	
図21	12	TR28	内層・Ⅵ層	土師器	罍	12.0	(7.0)			白い発色の精緻な胎土、雲母砂粒含む、上胴部に取手	
図21	13	TR47	SK1	陶器	天目茶碗	11.8	(2.5)			二次焼成を受け瓦質化	15C代
図21	14	TR47	SK1	瀬戸焼	持懸形香炉	12.6	(2.7)			内面は施釉なし	15C前半
図21	15	TR47	SK1	備前焼	壺	14.0	(3.5)			口縁部を押しえつけた玉縁	口縁部片
図21	16	TR47	SK1	備前焼	壺					口縁部を押しえつけた玉縁	口縁部片・二次焼成受け赤色化
図21	17	TR47	SK1	備前焼	壺	17.2	(7.5)			丸く切り曲げた玉縁、胴部内面まで自然釉がかかる	口縁部片
図21	18	TR47	SK1	備前焼	壺	39.6	(12.5)			丸く切り曲げた玉縁、胴部短く直立	口縁部片
図21	19	TR47	SK1	備前焼	鉢		(6.8)	12.4		底部から直線的に立ち上がる、外面自然釉がかかる	底部片
図21	20	TR47	SK1	備前焼	提鉢						底部片
図21	21	TR47	SK1	常滑焼	甕					口縁部縁部約4cm低下	8形式・14C後半
図21	22	TR47	SK1	瓦質土器	火鉢					口縁部内側に水平に屈曲、外面に突帯2条、間にスタンプ文	口縁部片、洗鉢Ⅳ、15C後半
図21	23	TR47	SK1	瓦質土器	風炉		(6.7)	24.2			胴部片
図21	24	TR47	SK1	瓦質土器	風炉		(8.3)			縦格子、スタンプ文	底部片
図22	25	TR47	SK1	青磁	椀花皿	10.0	(1.8)				口縁部片
図22	26	TR47	SK1	青磁	椀花皿	22.4	(2.1)			厚い胎輪、二次焼成を受け赤色化する	口縁部片
図22	27	TR47	SK1	青磁	椀花皿	12.6	3.3		6.4	厚い胎輪、裏面内は釉なし	口縁部片
図22	28	TR47	SK1	青磁	盤	20.8	(3.2)			釉に気泡を多く含む	口縁部片 14C末
図22	29	TR47	SK1	青磁	椀花皿	26.6	(3.5)				
図22	30	TR47	SK1	青磁	杯	11.0	2.0		7.0		
図22	31	TR47	SK1	青磁	杯	14.6	(2.5)				
図22	32	TR47	SK1	青磁	碗	14.4	(2.8)			細葉弁文	
図22	33	TR47	SK1	青磁	碗		(1.7)		9.8		底部片
図22	34	TR47	SK1	青磁	碗		(2.1)	7.6		厚い胎輪、高台内は釉の目に釉を割がす	底部片
図22	35	TR47	SK1	青磁	壺		(4.3)			丸い胴部の継入窪付面に突帯1条	胴部片
図22	36	TR47	SK1	青磁	壺		(7.5)	6.8		蓋付に釉なし	底部片
図22	37	TR47	SK1	青磁	蓋装飾部						
図22	38	TR47	SK1	青磁	香炉	11.0	(5.1)		8.4	内面は施釉なし	
図22	39	TR47	SK1	白磁	皿	9.2	2.2		4.4	アーチ状高台、見込みに重ね皿	D類・15C中頃
図22	40	TR47	SK1	白磁	皿	10.1	2.5		4.8	アーチ状高台、見込みに重ね皿	D類・15C前半
図22	41	TR47	SK1	白磁	皿	9.4	(2.2)			アーチ状高台、見込みに重ね皿	D類・15C前半
図22	42	TR47	SK1	白磁	皿	9.0	2.3		4.4	アーチ状高台、見込みに重ね皿	D類・15C前半
図22	43	TR47	SK1	白磁	皿	9.5	2.4		4.8	アーチ状高台、見込みに重ね皿	D類・15C中頃
図22	44	TR47	SK1	白磁	皿	9.2	1.9		4.7	アーチ状高台、見込みに重ね皿	D類・15C中頃
図22	45	TR47	SK1	白磁	皿	10.2	2.4		4.7	アーチ状高台、見込みに重ね皿	D類・15C前半
図22	46	TR47	SK1	白磁	皿	15.0	3.9		5.8	高台は施釉なし	E類
図22	47	TR47	SK1	白磁	皿	15.8	4.1		6.4	蓋付から高台内は施釉なし	E類
図23	48	TR47	SK1	青花	皿		(4.8)	5.0		高台断面三角形	15C後半～16C前半
図23	49	TR47	SK1	青花	皿	9.8	2.4		5.4	口縁、高台断面三角形、全体に薄い作り	景徳鎮
図23	50	TR47	SK1	青花	碗	15.4	(2.8)			口縁外面直下に磨蝕した雷文帯	B群
図23	51	TR47	SK1	白明	碗			16.2	6.2	白色象嵌が施される	胴部と底部片

第Ⅳ章 総 括

1. 遺構

今回の調査は、田村城跡の掘を検出し、城域を確定することを主目的とした。検出した遺構は、土坑3基、溝22条（堀を含む）、ピット10個、井戸跡1基、性格不明遺構1基である。

①外堀（図24）

外堀南辺をTR28とTR29で検出することができた（図24-①）。ともに堀の北肩の検出で、北側に人頭大の集石を伴う。TR28で検出された集石は、北側から流れ込んだ状況であり、外堀の内側に土塁が築かれ、その裾に敷かれていたものと考えられる。また、外堀の北側で断片的に検出した溝（TR25SD1、TR28SD1）は隣接するTR26・27では検出することができなかった。少なくとも東西方向に直線に延びるものではなく、南北どちらかに屈曲、あるいは虎口状に途切れるなどの可能性もあるが、現時点では不明である。

TR31～33の弧状の集石（図24-②）も外堀に関連する遺構と考えられる。この集石は、外堀南辺の延長線上から北に向かって弧を描くことから、外堀の南東角部分と思われたが、北側に設定したTR50では外堀東辺は検出できなかった。また、最も東側のTR34では検出できなかった。

これらの遺構は高知空港拡張に伴う発掘調査のLoc.42・43及びA4区で確認された外堀の延長線上に位置する。

②内堀（図25）

内堀の西辺をTR35・36・42（図25-①）、北辺をTR46・48・49（図25-②）で検出した。内堀西辺はTR38・39で検出することが出来なかったため、真っ直ぐ北には延長していない。TR42の北側で西方向に屈曲し、TR40で検出した東西方向の溝に繋がる可能性がある。

内堀北辺は、北側に水路があるため全幅を検出できなかったが、検出幅で7.0mを越える。北側水路から南肩までは、全ての検出部分で約8mを測り、わずかに蛇行しながら水路に平行する。南側に設定したTR38では検出されなかったため、調査区西端で南に屈曲せずに西に延びると考えられる。

③溝

堀以外には大小18条の溝を検出した。城域東南部のTR34SD1とTR50SD1（図24-③）は断面形状や規模から南北方向に延びる同一の溝と捉えることができる。外堀東辺が想定された場所での検出であるが、その規模からは外堀とは捉えがたい。TR50ではこの溝を挟んで西側に遺構が検出されるが、東側は皆無である。また、埋土には水が流れていた痕跡がないことから、空堀と考えられ、区画溝の可能性もある。

内郭部で検出した南北方向の溝TR43SD1とTR47SD1も、規模と方向から同じ溝と捉えることができる（図25-③）。TR47SD1はその延長が周囲のトレンチで検出できなかったことから、溝の北端部にあたる。その他の溝は延長方向がずれたり、隣のトレンチで延長が見つからなかったりと、断片的な検出に留まる。

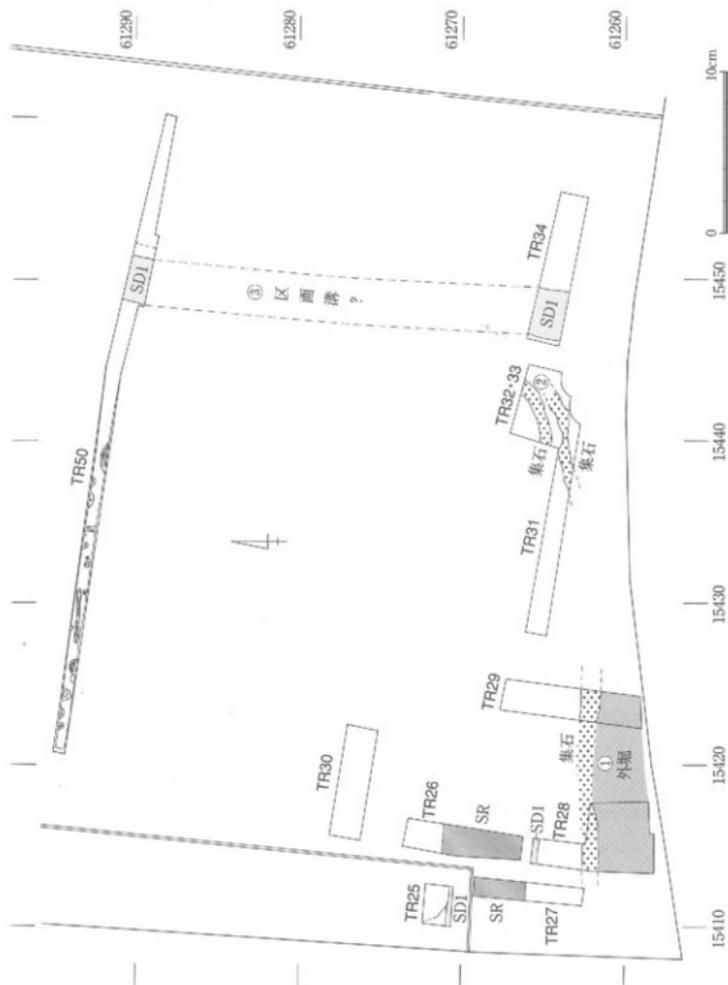


图24 外堀南東部遺構配置図

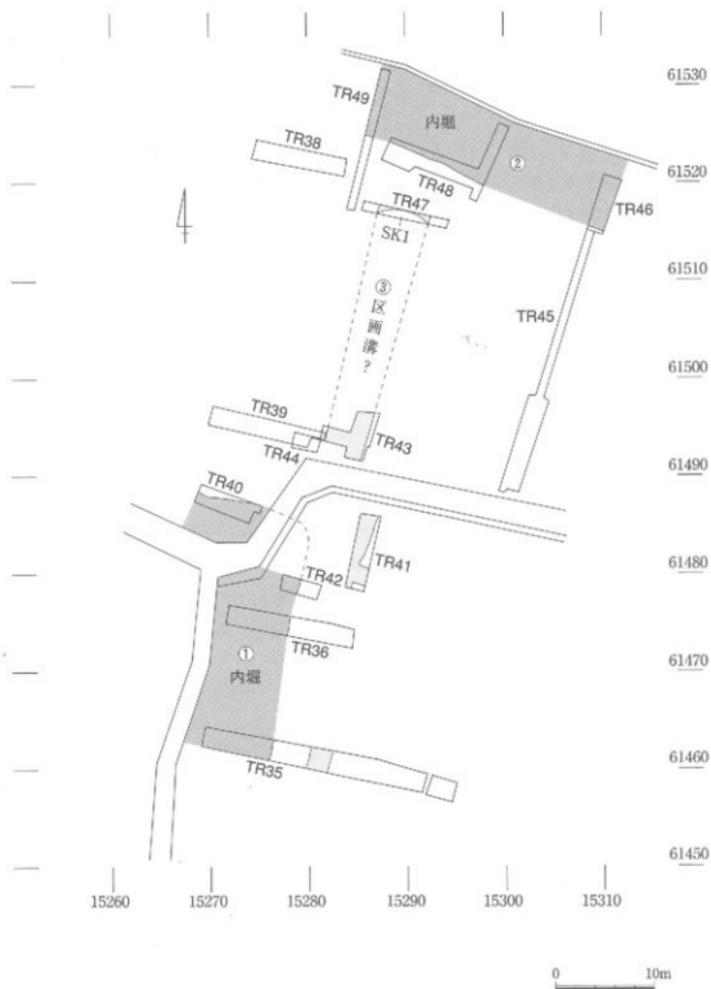


图25 内郭部遺構配置図

④土坑

田村城跡に関連する遺構としてTR47SK1があげられる。多量の人頭大の円礫と焼土とともに土師器、陶器、瓦質土器、貿易陶磁器類が多量に出土した。TR47SD1埋没最終段階の窪みを利用して廃棄土坑として利用したと考えられる。

2. 遺物

田村城跡に関連する遺物として堀からの出土遺物は少なく、15～16世紀代の土師器鍋、備前焼、天目茶碗等がわずかに出土したのみである。

廃棄土坑SD47SK1からは、人頭大の円礫や焼土塊とともに古瀬戸の天目茶碗や腰袴形香炉などの国産陶器類、備前焼や常滑焼の壺類、貿易陶磁器類が出土した。青磁の皿・碗は龍泉窯系のもので軸が厚くかかる優品が多い。白磁の皿はすべて高台に挟りの入ったアーチ状高台をもち、端反り皿は森田編年E-2類に該当する。供膳具以外では青磁の壺・盤・香炉や李朝青磁の壺など、奢侈品も多く出土している。特に李朝青磁のまとまった出土は高知県でもほとんど例がない。こうした品物は城館クラスの場所では出土しないものであり、時期的にも14世紀末～16世紀初めと、田村城跡の存続時期と重なるものである。

3. まとめ

室町期の田村庄は西山地藏院を領家とする荘園であった。当院が守護細川方の寺であったことから、この地に守護代が入部し、城館の地として選ばれた。以来四代にわたって在城し、応仁の乱による細川勝益の上洛、永世四年(1507)細川一族の京都退転まで守護代城館として役割を約一世紀半近く果たしてきたと伝えられる。田村城跡がその役目を終えた後、土塁は崩され、堀は埋められ、耕作地化され、現在の田村城跡周辺は耕作地と宅地が広がる。

田村城跡の姿を現在に伝えるものは「城」「東門」「西門」「市場」等の城館に関するホノギと城八幡が鎮座する土塁のみである。田村城跡に関する資料としては、『長宗我部地検帳』と安永期の野見嶺南らによる『土佐細川氏田村城跡之図』を掲げることができる。島田豊寿氏はこれらの資料と、現地に残る伏長地割などの景観をもとに、歴史地理学的手法を用いて復元を試み、複濠複郭式の城館構造を推定している。そこで、今回の調査成果を島田氏の復元をもとにまとめてみたい。

今回の調査における最大の成果は、内郭の範囲をほぼ確定出来たことである。内堀の西辺と北辺を検出し、内郭部の範囲は南北約130m、東西約120mを測る。これは、島田氏の復元した内郭部の範囲と重なる結果である。内堀の平面形については、単純な方形ではなく、北西部は西側に張り出す形をもち、内堀内部で確認した溝とあわせて虎口状の複雑な構造も想定できる。

外堀の南辺と西辺についても、これまでの調査で島田氏の復元が裏付けられている。今回の調査では、Loc.43で確認された外堀南辺の延長線上で、集石を伴う溝の肩を確認した。集石は外堀の内側の土塁に敷かれていた可能性が高い。この溝を外堀南辺と考えると、南西角からの延長は約280mを測り、島田氏が外堀東片を想定した「市場」と「二本松」の境を越えることとなるが、現在のところ、外堀東辺が確認されていないため、外堀として扱いたい。

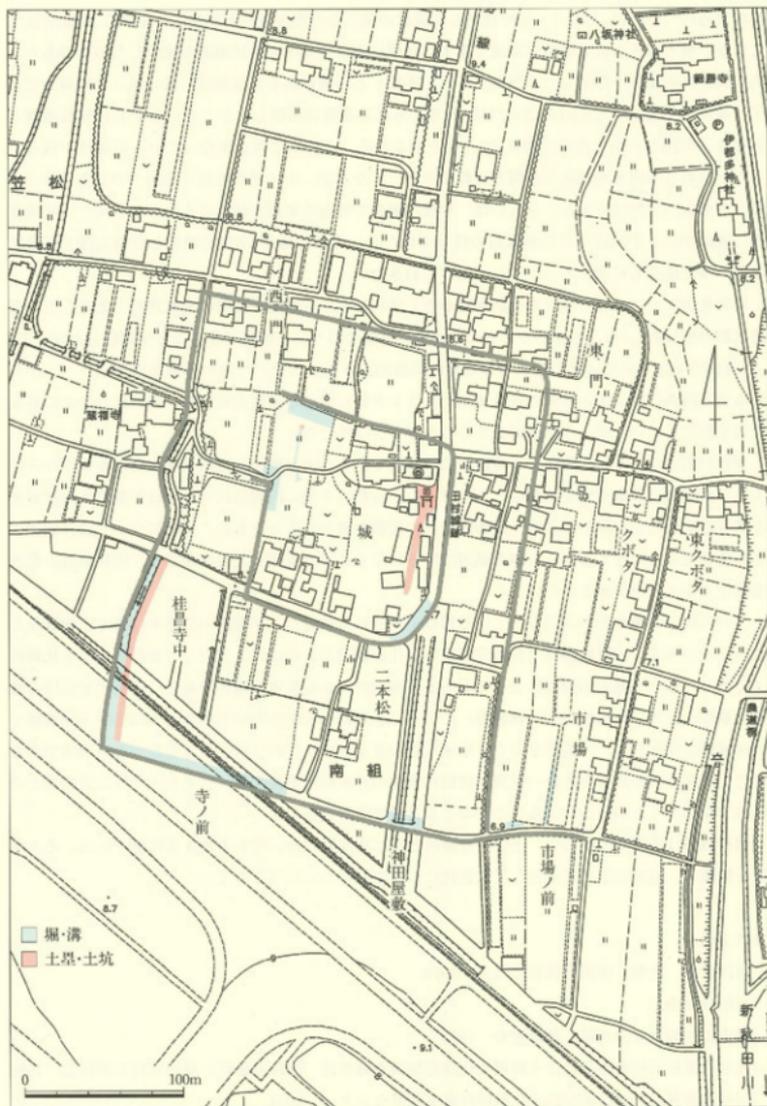


图26 田村城跡城域推定図

外堀東辺については、TR31～33で検出した弧状の集石を外堀南東角と想定し、北側にTR50を設定したが、堀と考えられる遺構は確認できず、西側に遺構の集中する区画溝を検出したのみである。島田氏が外堀東片を想定した「市場」と「二本松」との境にある狭長地割の部分は、今回調査できず、隣接して設定したTR17～21では堀と考えられる遺構は検出しなかった。しかし、狭長地割と隣接する道路と水路を含めた幅は約7.8mを測るため、この下に堀が重なっている可能性が残る。また、内堀との間隔が城域の西側と比較すると広がるが、ホノギの地割りに沿うのであれば「市場」の東側の可能性もある。あるいは、今後の調査で外堀の東辺が検出できなかった場合、城域東側に痕跡が残る旧秋田川に外堀東辺の役目を持たし、その内側をTR50で検出した南北溝で区画するといった構造も可能性の一つとしてあげておきたい。

外堀北辺については、現況の道路水路が逆L字状に曲がる場所を外堀の北東角部と想定した。道路水路の幅は約3.8mしかないことから、両側で外堀の落ち口が検出できることを期待したが、TR1～14やTR51・56では堀と考えられる遺構は検出できなかった。今回の外堀北辺想定ラインから20mほど内側には、東西方向の狭長地割とクランク状に曲がる道路が存在し、島田氏はここに外堀北辺を想定しているが、今回は調査することができなかった。

今回の調査はトレンチ調査による断片的な調査であるため、検出した堀や溝の繋がりがつかみにくく、内郭部の構造を充分つかむことはできなかった。今後、内郭部については可能であれば面的な調査を実施し、内堀や区画溝、建物跡などの配置を確認するとともに、外堀については、周辺の宅地化が進んでいることから、調査範囲は限られてくるが、東辺と北辺を確認し、田村城跡の範囲を確定することを課題としたい。

この年代の詳細が明らかになっている例は全国的にも少なく、守護所の位置や遺構が不明確なところが多い中で、田村城跡は土佐の守護代の在住が確実であるばかりでなく、地割りなども比較的よく残っており、地表面観察によってもある程度形のわかる貴重な遺跡である。付近の家臣団の環濠屋敷群や氏寺である桂昌寺（細勝寺）の存在、さらには前浜の町屋や港湾との関係や千屋城跡・岩村城跡殿閣関係など、守護所をめぐる地域社会の有り様が具体的に解明できる数少ない事例である。また、廃棄土抗から得られた一括資料は田村城跡の存続期間を検証し、交易ルートなど他地域との経済的な関わりも明らかにすることができる貴重な資料である。

田村城跡は本市のみならず、土佐の守護所として高知県においても重要な文化財である。その実態を解明し、地域の歴史遺産として次世代に引き継いでいかねばならない。

参考文献

『南国市史 上巻』南国市教育委員会 1979

『旧田村村史』

『細川田村城と守護代館』島田豊寿 1969

『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』高知県教育委員会 1986

『田村遺跡群Ⅱ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004

『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 1995

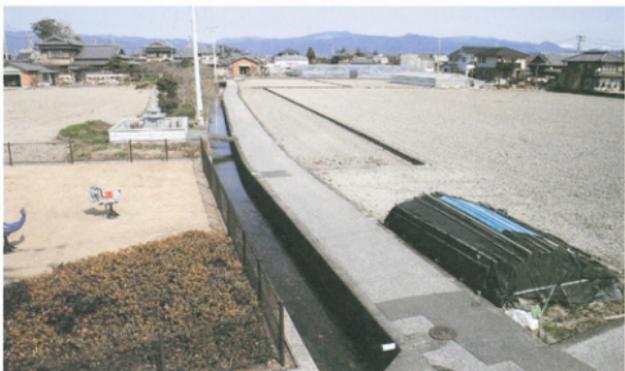
写真図版



内郭部(南東より)



細勝寺(桂昌寺)跡地と土塁



外堀東辺想定地(南より)



TR1～3 調査前全景(南より)



TR12～13 調査前全景(東より)



TR4～11 調査前全景(北より)



TR 1 完掘状況



TR 1 セクション



TR 2 完掘状況



TR 3 完掘状況



TR 4 完掘状況



TR 5 完掘状況



TR 6 完掘状況



TR 7 完掘状況



TR 8 完掘状況



TR9完掘状況



TR10完掘状況



TR11完掘状況



TR12完掘状況



TR13完掘状況



TR14完掘状況



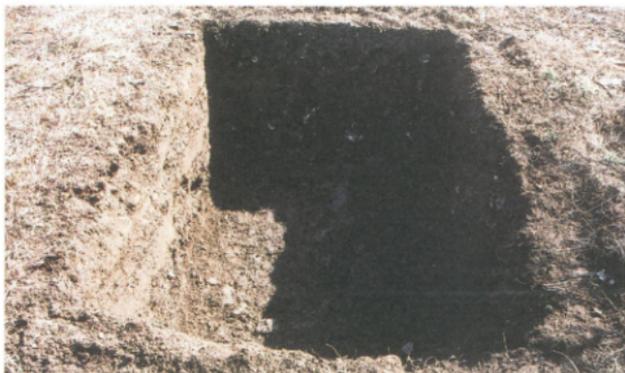
TR15完掘状況



TR16完掘状況



TR17～25調査前全景(西より)



TR17完掘状況



TR18完掘状況



TR19完掘状況



TR20完掘状況



TR21完掘状況



TR22完掘状況



TR23完掘状況



TR24完掘状況



TR25SD 1 検出状況



TR25セクション



TR26～28調査前全景(南より)



TR26完掘状況



TR26セクション



TR27完掘状況



TR27西壁セクション(北)



TR27西壁セクション(南)



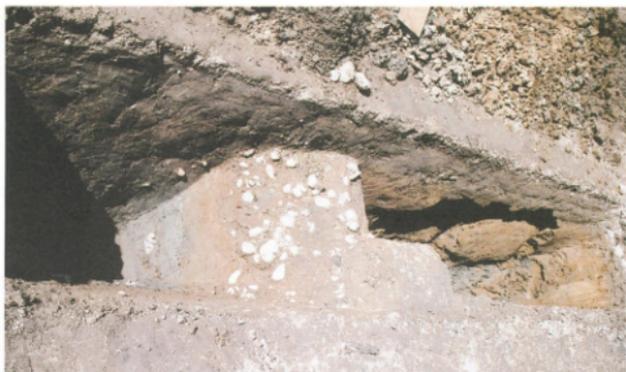
TR28集石検出状況



TR28外堀東壁セクション



TR28完掘状況



TR29完掘状況



TR30完掘状況



TR31完柵状況



TR31～33集石検出状況



TR32・33集石検出状況